

## IV 調査結果

### 《 I 男女共同参画関係 》

#### 1 社会における制度・慣行について

##### 1 静岡県における男女共同参画の機会の確保

問1 本県において、男女が性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる機会が確保されていると思いますか。(1つに○)

**“確保されていると思う”は32.5%、“確保されていると思わない”は42.1%**

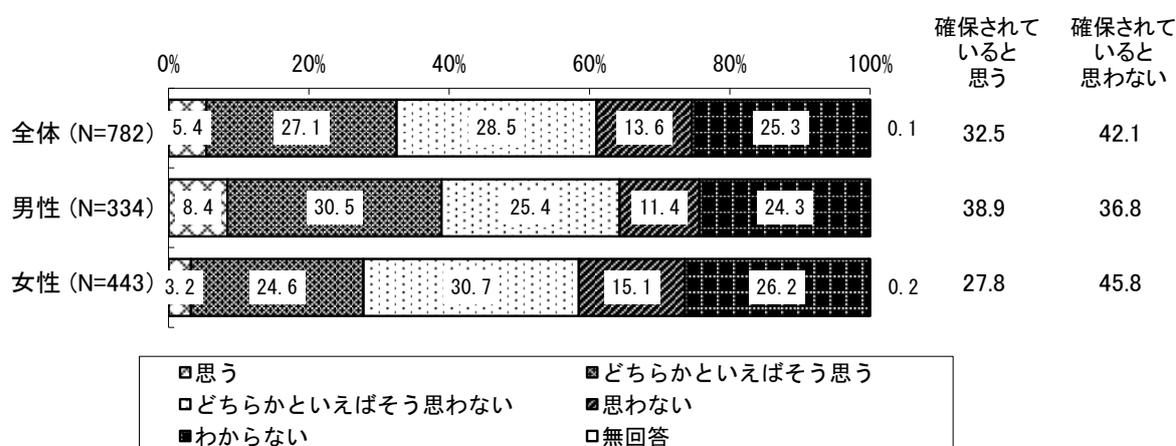
■静岡県において、男女が性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる機会が確保されていると思うかをたずねたところ、「思う」が5.4%、「どちらかといえばそう思う」が27.1%で、合わせた“確保されていると思う”は32.5%であった。同様に“確保されていると思わない”(「どちらかといえばそう思わない」+「思わない」)は42.1%であり、“確保されていると思う”を上回っている。

■性別にみると、“確保されていると思う”が男性では38.9%、女性では27.8%と認識の差が見られる。また、“確保されていると思わない”は男性では36.8%、女性では45.8%で、女性の方が高くなっている。

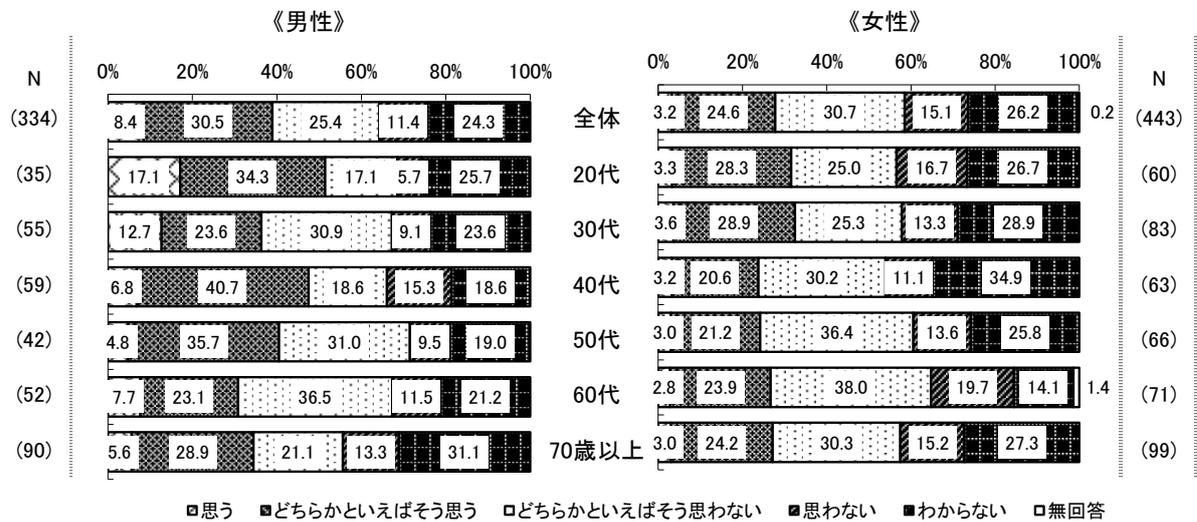
■性・年代別に見ると、“確保されていると思う”は、男性では20代が51.4%と高く、女性では30代が32.5%と高くなっている。“確保されていると思わない”は男性、女性とも60代が高くなっている。

■経年比較でみると、“確保されていると思う”は、平成27年度まで減少傾向にあったが、今年度ではやや増加している。

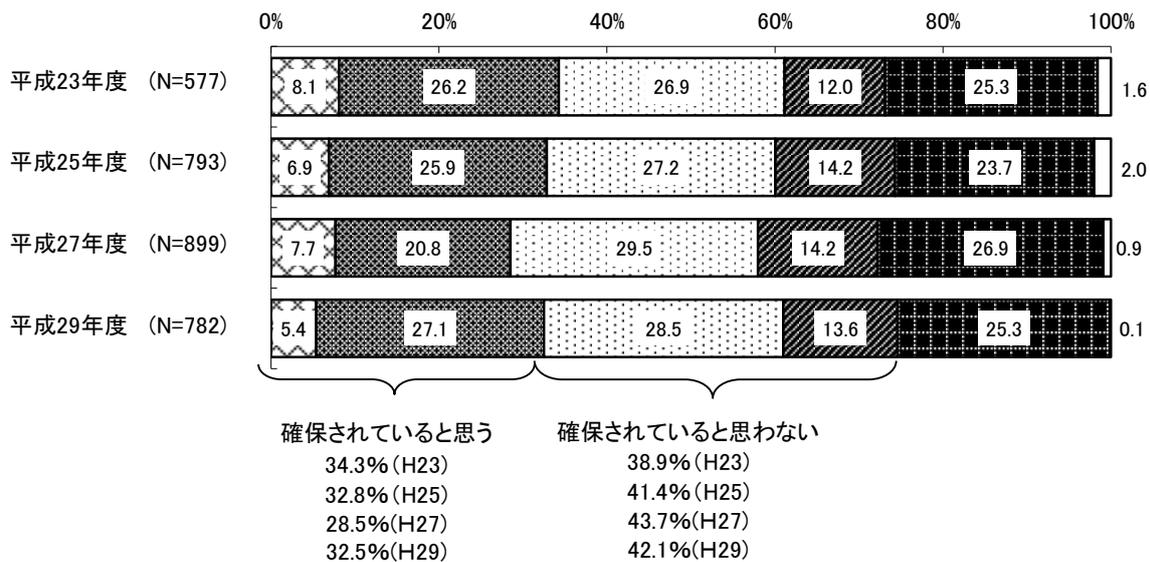
【静岡県における男女共同参画の機会の確保】



【性・年代別】



【経年比較】



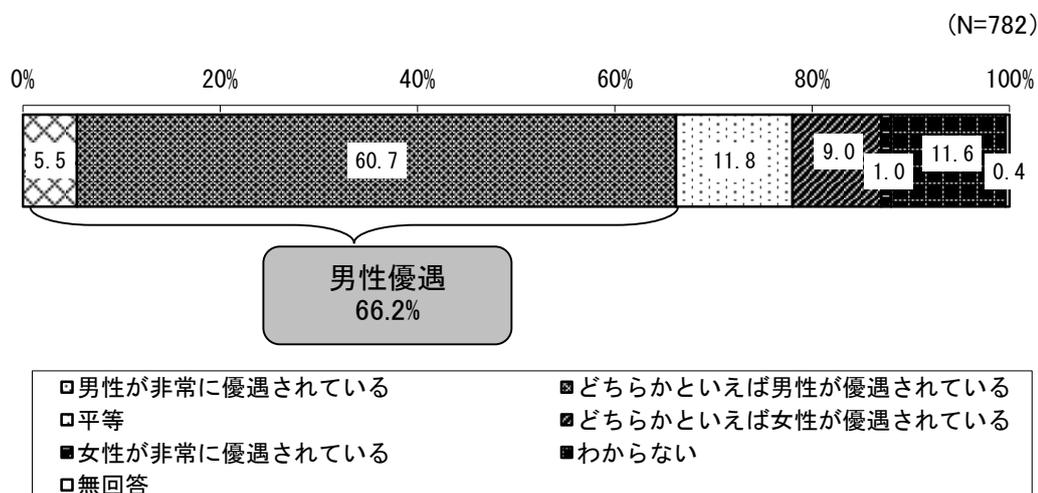
2 社会全体における男女平等感

問2 あなたは、社会全体で見た場合、男女平等になっていると思いますか。(1つに〇)

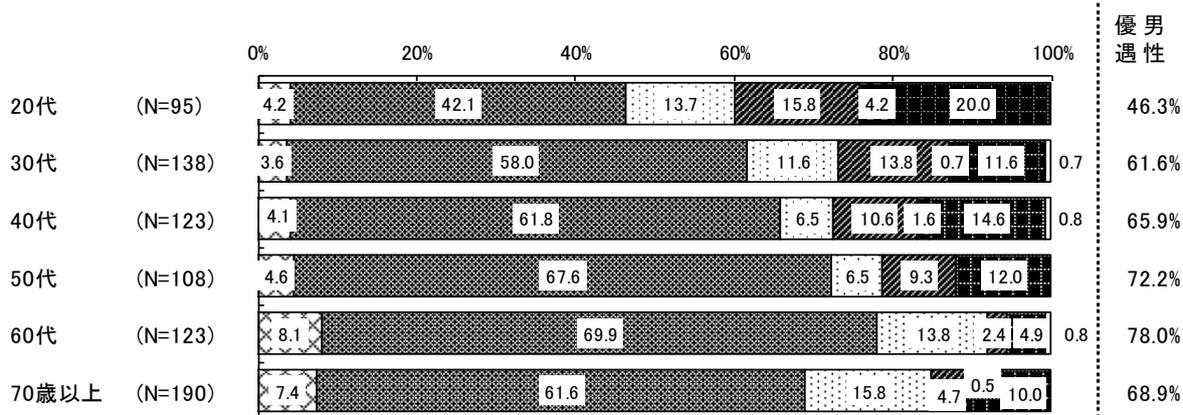
“男性優遇”と感じている人は66.2%、経年比較を見ると年々減少傾向にある。

- 社会全体でみた場合の男女平等についてたずねたところ、「男性が非常に優遇されている」が5.5%、「どちらかといえば男性が優遇されている」が60.7%で、合わせた“男性優遇”が66.2%と6割を超えている。
- 年代別にみると、「男性が非常に優遇されている」と「どちらかといえば男性が優遇されている」を合わせた“男性優遇”が高いのは、50代、60代で、7割を超えている。
- 性別に得点をみると、男性が0.52点、女性が0.83点となっており、女性の方が“男性優遇”と感じている。
- 性・年代別に得点をみると、“男性優遇”は、女性の40代が0.96点と最も高くなっている。60代では、男性が0.90点、女性が0.88点と男女の意識の差が低い。  
20代では女性0.59点に対し、男性は-0.07と男女間の意識の差が大きい。
- 経年比較をみると、“男性優遇”の割合は、今年度最も低くなっている。

【社会全体における男女平等】

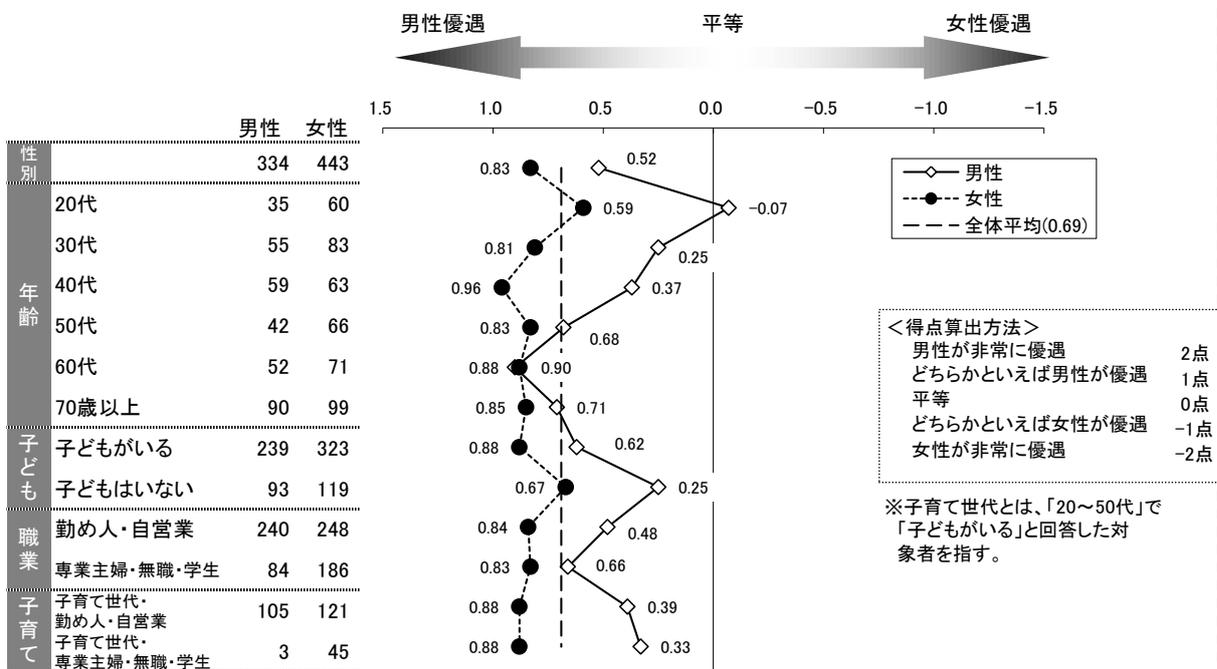


【年代別】

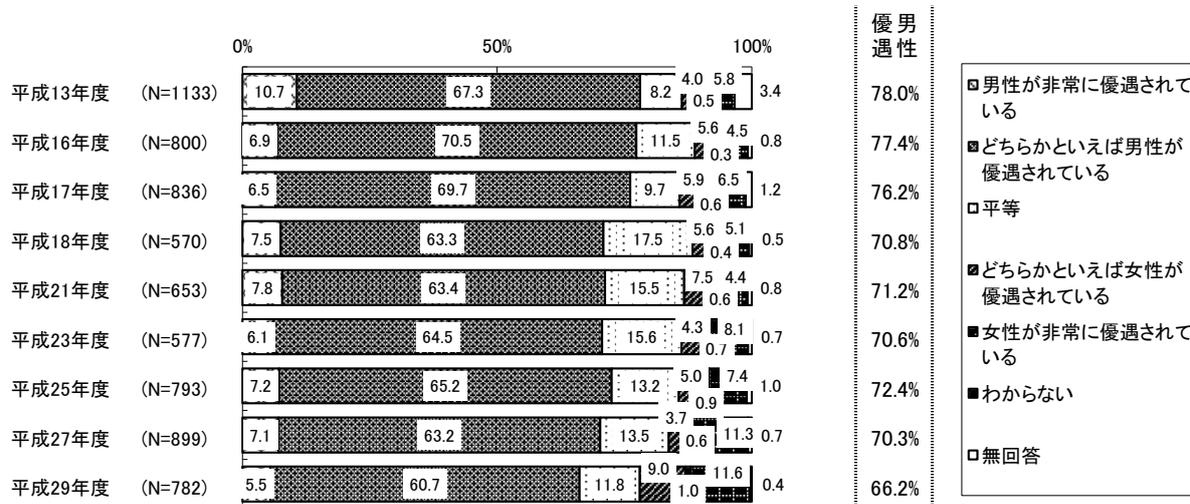


男性が非常に優遇されている  
 平等  
 女性が非常に優遇されている  
 無回答  
 どちらかといえば男性が優遇されている  
 どちらかといえば女性が優遇されている  
 わからない

【属性別 得点】



【経年比較】



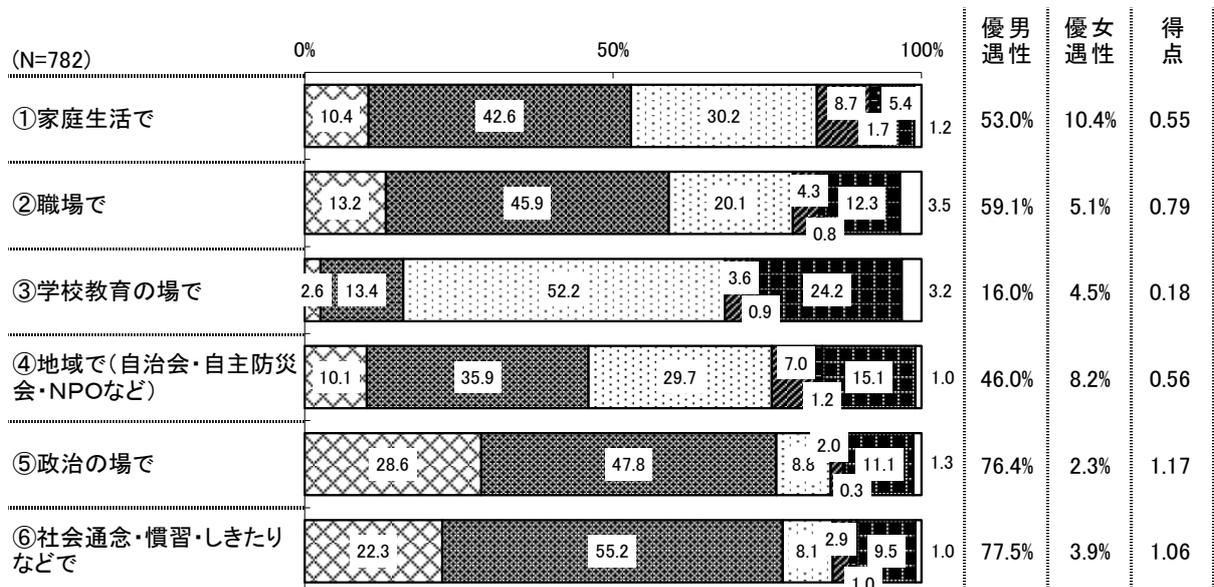
3 各分野における男女平等感

問3 あなたは、次の分野で男女が平等であると思いますか。(それぞれ1つに○)

“学校教育の場”以外の分野では男性優遇と感じる割合が高い。

- 様々な分野について男女が平等であるかをたずねたところ、①～⑥のすべての分野で“男性優遇（「男性が非常に優遇」＋「どちらかといえば男性が優遇」）”との回答が“女性優遇（「女性が非常に優遇」＋「どちらかといえば女性が優遇」）”との回答を上回る結果となった。
- 特に、“⑥社会通念・慣習・しきたりなどで”、“⑤政治の場で”については、“男性優遇”がそれぞれ77.5%、76.4%と高い割合となっている。
- しかしながら“③学校教育の場で”は、“男性優遇”が16.0%と“女性優遇”の4.5%を11.5ポイント上回っているものの、半数以上の52.2%が「平等」と回答しており、最も平等と感じられる分野である。

【各分野における男女平等】



- 男性が非常に優遇
- 平等
- 女性が非常に優遇
- 無回答
- どちらかといえば男性が優遇
- どちらかといえば女性が優遇
- わからない

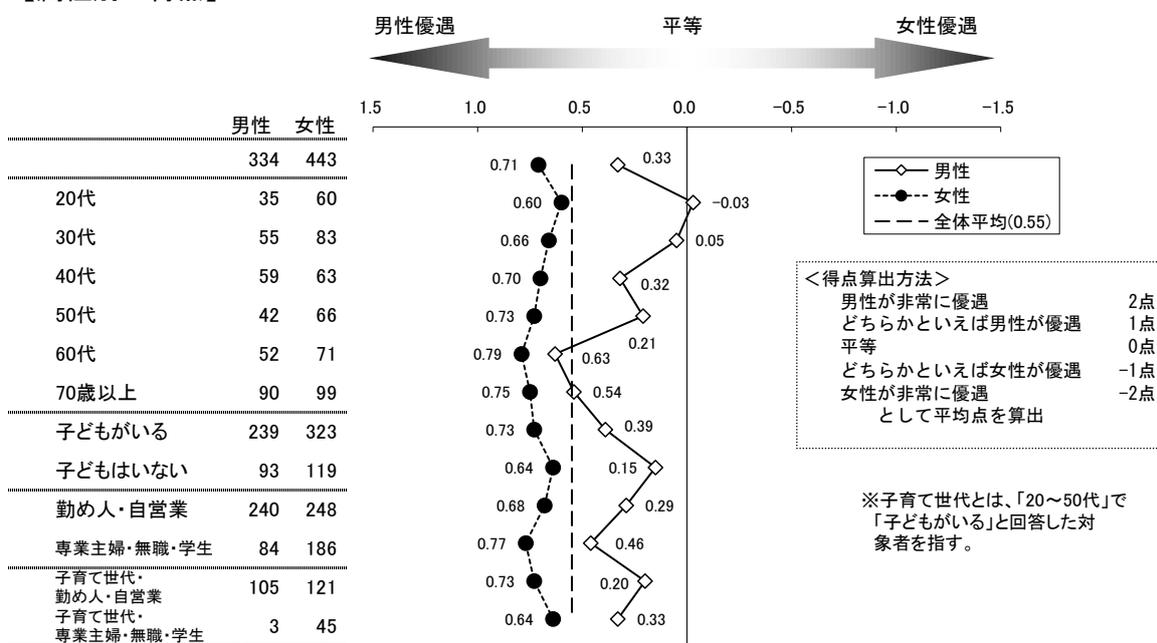
<得点算出方法>  
 男性が非常に優遇 2点  
 どちらかといえば男性が優遇 1点  
 平等 0点  
 どちらかといえば女性が優遇 -1点  
 女性が非常に優遇 -2点  
 として平均点を算出

① 家庭生活で

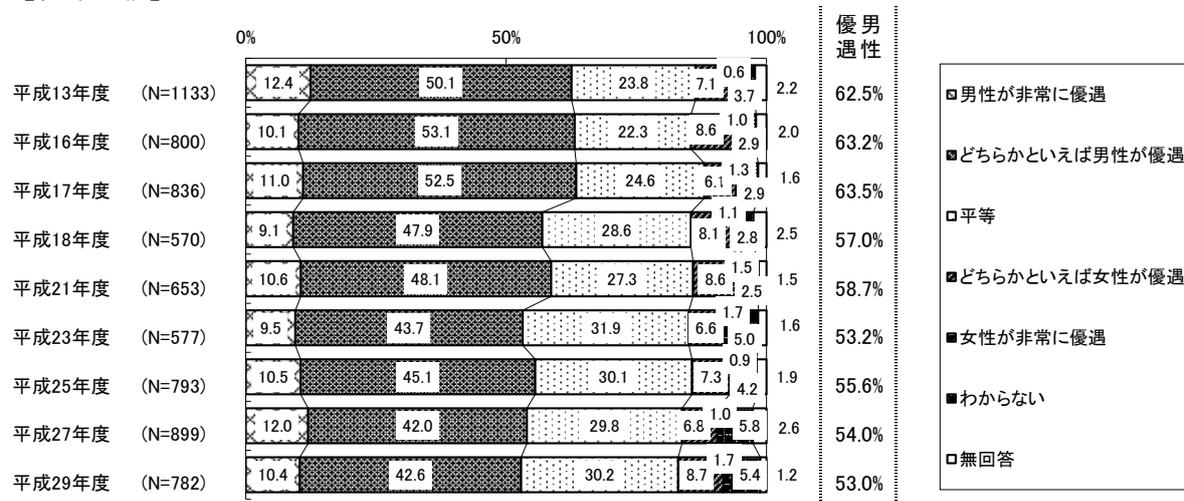
男性以上に女性は“男性優遇”と感じている。特に20代、30代で男女の意識の差が大きい。

- 家庭生活について得点を性別にみると、男性が0.33点、女性が0.71点となっており、女性の方が“男性優遇”と感じている。
- 性・年代別にみると、女性60代が最も高く、年代が下がるにつれて低くなっている。20代、30代では、男女間の意識の差が大きい。
- 子育て世代でみると、勤め人・自営業では、女性の0.73点に対し、男性は0.20点と、男女間の意識の差が大きい。
- 経年比較を見ると、“男性優遇”の割合は徐々に減少の傾向にあり、過去最も高い平成17年度に比べ、10.5ポイントの差がある。

【属性別 得点】



【経年比較】

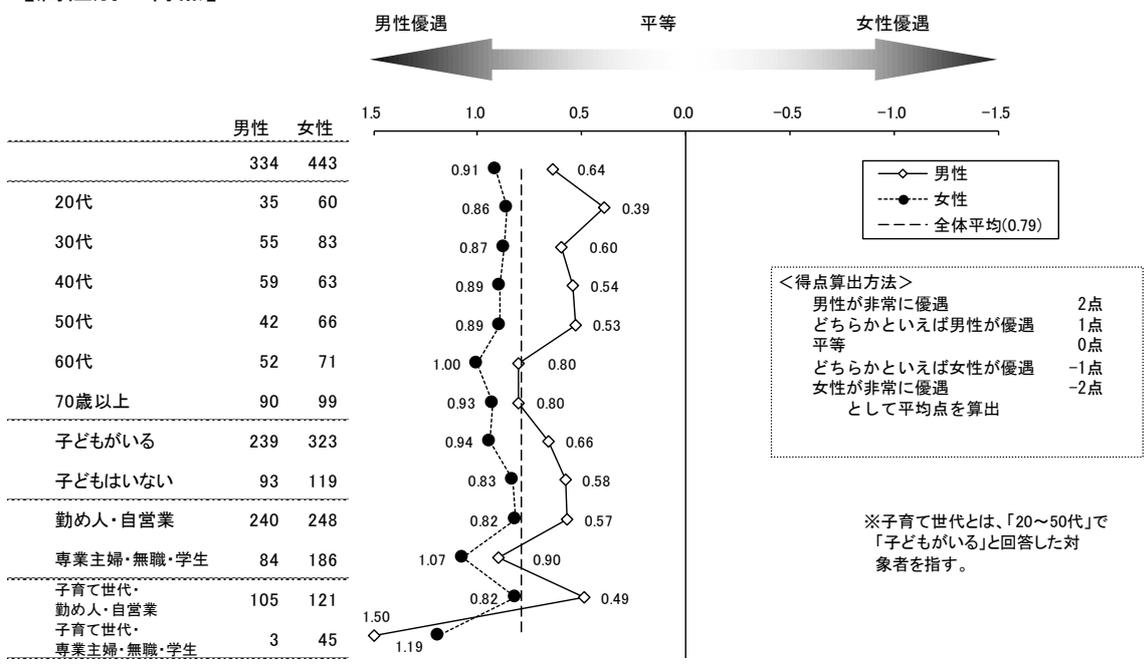


② 職場で

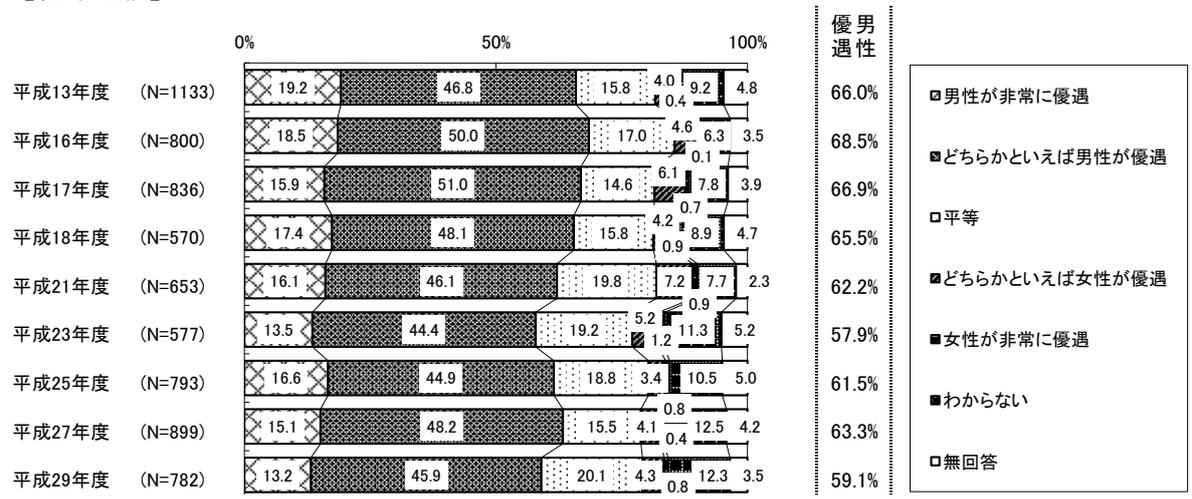
男性以上に女性は“男性優遇”と感じている。“20代”で男女の意識の差が大きい。

- 職場について得点を性別にみると、男性が0.64点、女性が0.91点となっており、女性の方が“男性優遇”と感じている。
- 性・年代別にみると、60代の女性で1.00点と高くなっており、“男性優遇”と感じる傾向が最も高い。男性の20代では0.39点と得点が低く、男女間での意識の差が大きくなっている。
- 子育て世代でみると、専業主婦・無職・学生では、男性が1.50点、女性が1.19点と、男性の方が“男性優遇”を強く感じており、勤め人・自営業では、女性が0.82点、男性が0.49点と女性の方が“男性優遇”を感じている。
- 経年比較を見ると、“男性優遇”は、平成25、27年度と連続して増加傾向にあったが、平成29年度は減少している。

【属性別 得点】



【経年比較】

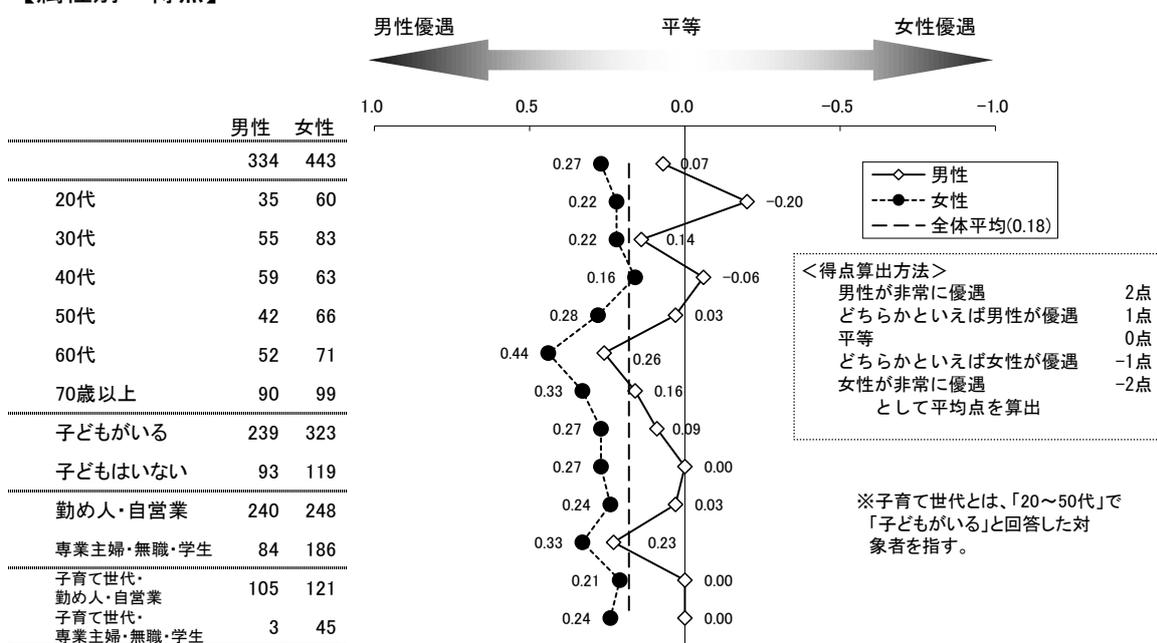


③ 学校教育の場で

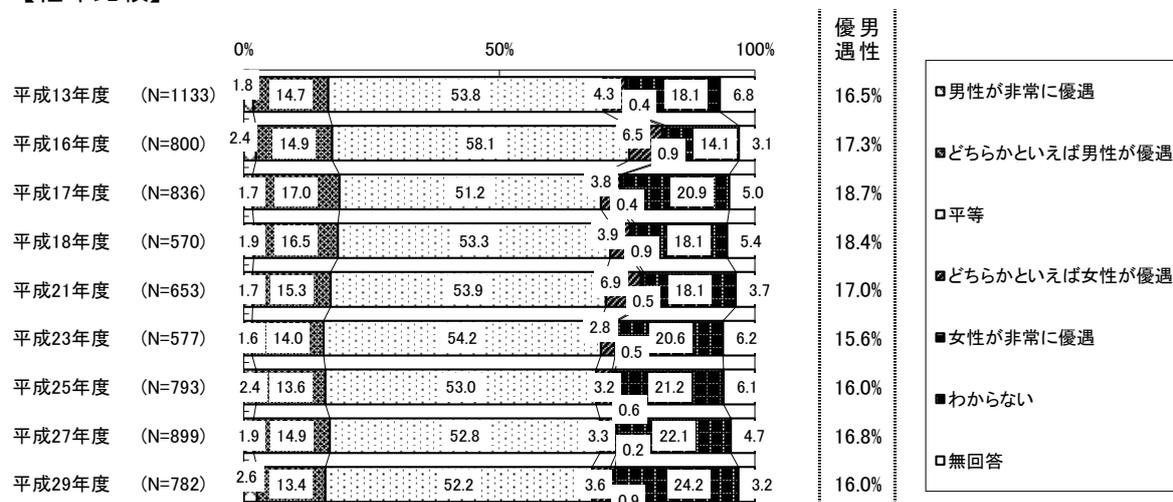
女性 60代で“男性優遇”の意識が高い。

- 学校教育の場について得点を性別にみると、男性が 0.07 点、女性が 0.27 点となっており、女性のほうが高い得点となっているものの、他の項目に比べて“男性優遇”の意識は低い。
- 性・年代別にみると、男性の 20代はやや”女性優遇”と感じている傾向にある。60代では、男女とも“男性優遇”の意識が高くなっている。
- 子育て世代にみると、男性は、勤め人・自営業と専業主婦・無職・学生ともに平等と感じており、女性と意識の差がある。
- 経年比較をみると、“男性優遇”の割合に大きな変化はみられない。

【属性別 得点】



【経年比較】

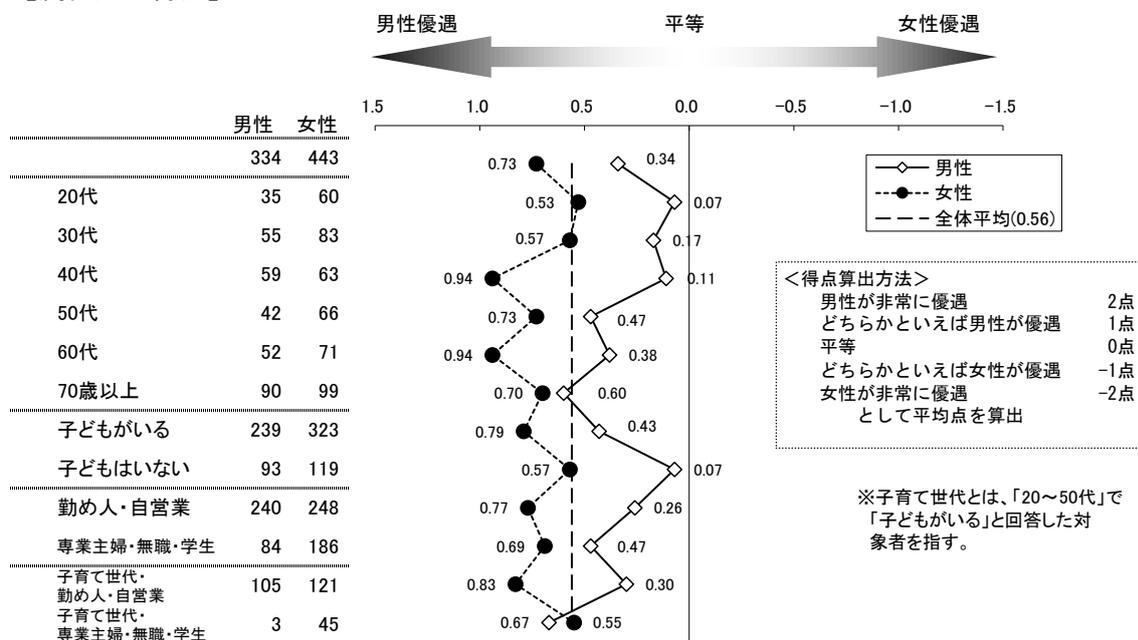


④ 地域で(自治会・自主防災会・NPOなど)

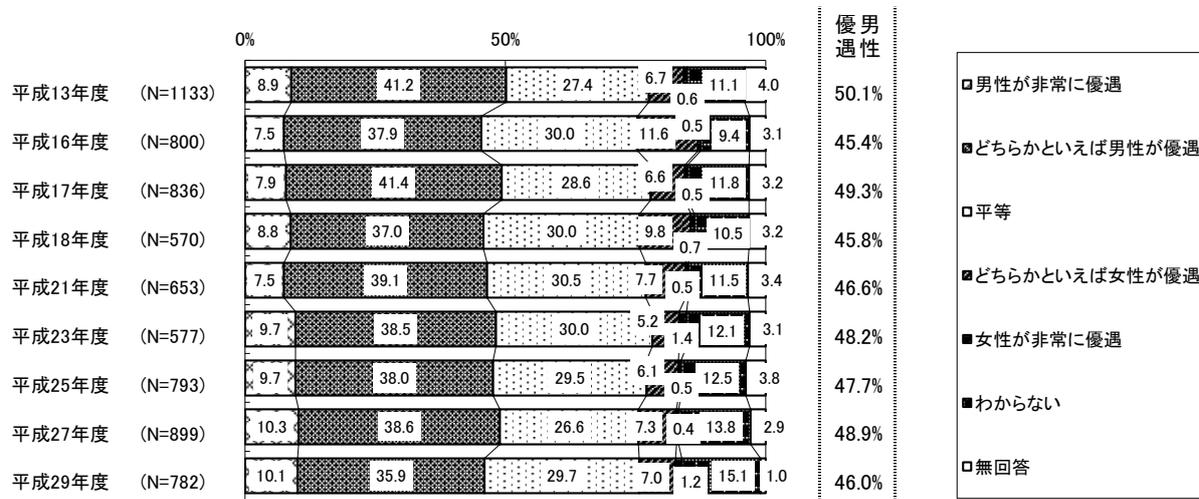
特に40代・60代の女性が“男性優遇”と感じている。

- 地域でについて得点を性別にみると、男性が0.34点、女性が0.73点となっており、女性の方が“男性優遇”と感じている。
- 性・年代別にみると、40代、60代の女性がともに0.94点で、“男性優遇”を最も強く感じており、40代では男性が0.11点と、男女間の意識の差が大きくなっている。
- 子育て世代にみると、勤め人・自営業で女性が0.83点と、“男性優遇”の意識が高くなっている。専業主婦・無職・学生では、男性の方がやや高くなっているが、男女間の差は低い。
- 経年比較をみると、“男性優遇”は、今年度はやや減少している。

【属性別 得点】



【経年比較】



⑤政治の場で

20代、30代、40代で男女の意識の差が大きい。

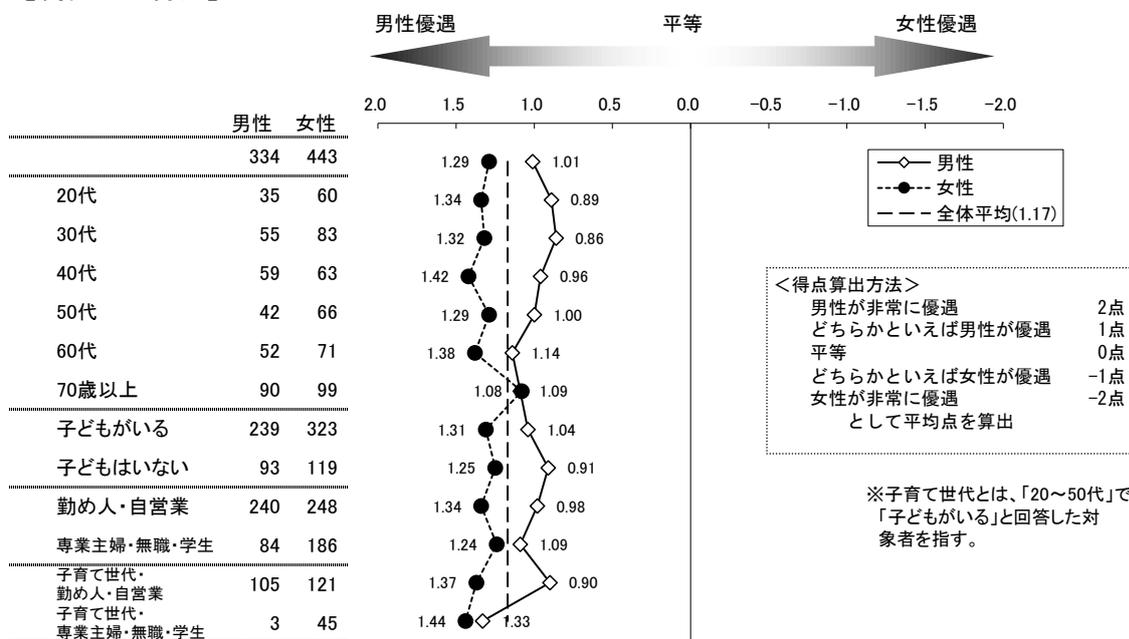
■政治の場について得点を性別にみると、男性が1.01点、女性が1.29点となっており、女性の方が“男性優遇”と感じている。

■性・年代別にみると、20代、30代、40代では、男女の差が大きく、女性の方が“男性優遇”と感じる傾向にある。70歳以上では、男女の差がほとんど見られない。

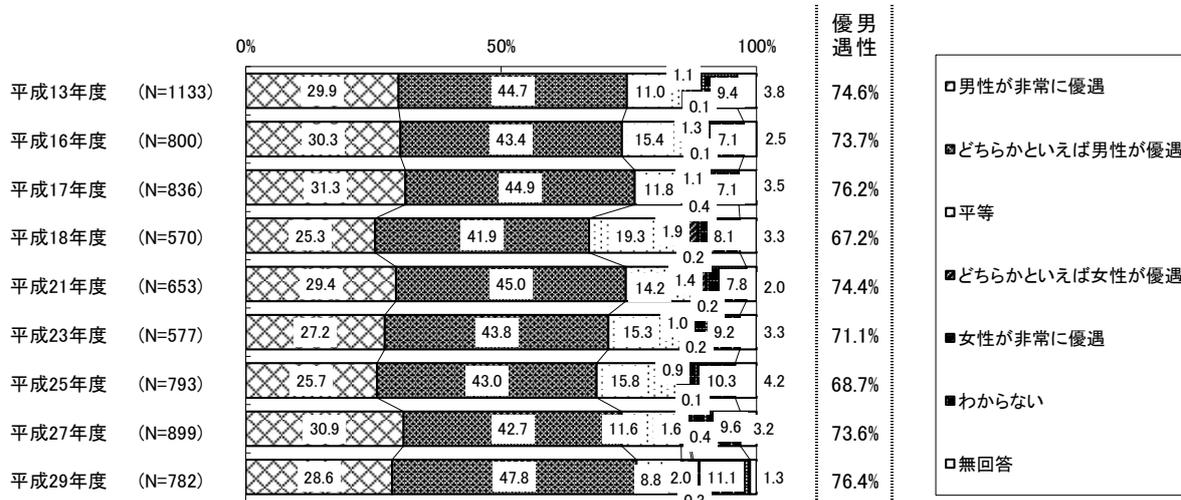
■子育て世代でみると、勤め人・自営業では、女性が1.37点、男性が0.90点で、女性の方が男性より“男性優遇”と感じている。専業主婦・無職・学生では、男女間で大きな差はみられない。

■経年比較をみると、平成29年度は“男性優遇”は最も高く、最も低い平成18年度と9.2ポイントの差がある。

【属性別 得点】



【経年比較】

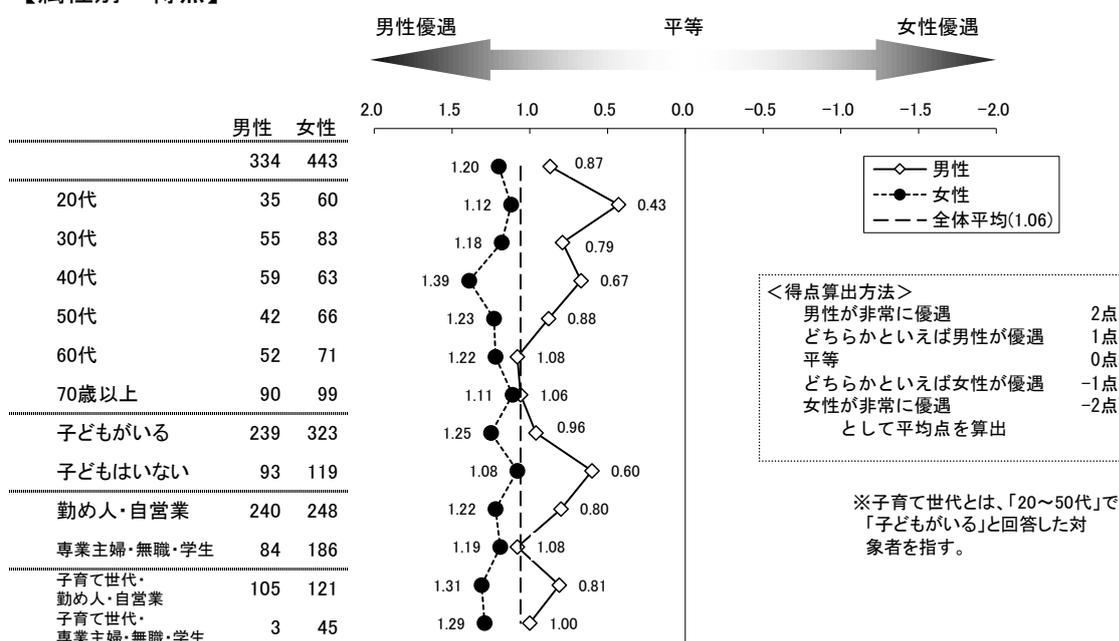


⑥ 社会通念・慣習・しきたりなどで

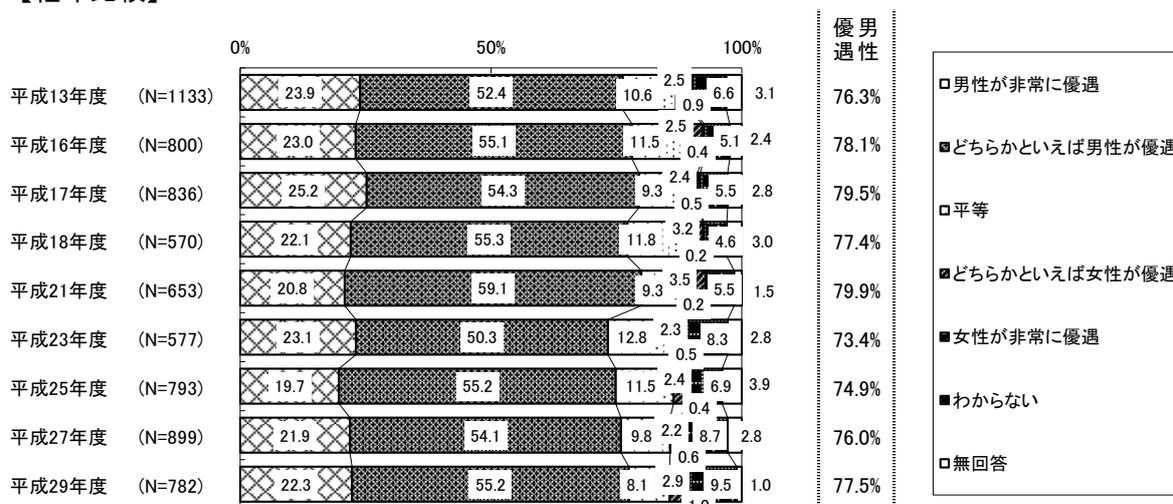
男性以上に女性は“男性優遇”と感じている。

- 社会通念・慣習・しきたりなどについて得点を性別にみると、男性が0.87点、女性が1.20点となっており、女性の方が“男性優遇”と感じている。
- 性・年代別にみると、20代、40代で男女間の意識の差が大きくなっている。
- 子どもの有無別にみると、子どもはいないの男性が0.60点と低くなっている。
- 経年比較をみると、“男性優遇”は平成23年度に減少したが、25年度以降は増加傾向にある。

【属性別 得点】



【経年比較】



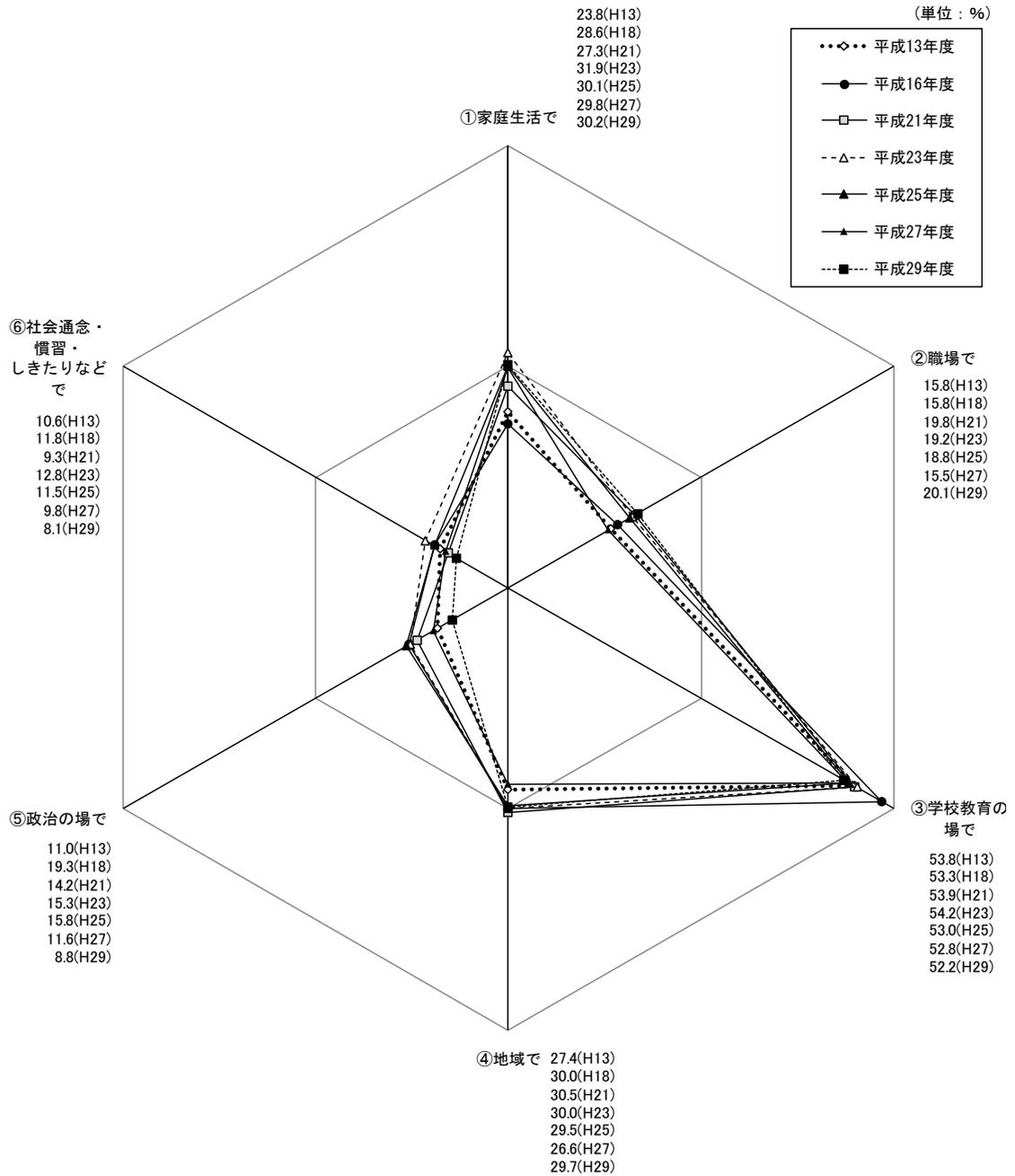
◀ 各分野の男女平等 まとめ ▶

性別でみると、女性、特に“40代”“60代”“子どもがいる”で“男性優遇”と感じている。

- 各分野の特徴を下表にまとめた。どの分野においても、男性より女性が“男性優遇”と感じており、男女間の意識の違いは大きい。
- 年齢では、“男性優遇”の傾向が強いのは、家庭や職場・学校教育などの場で60代の女性、政治・社会通念やしきたりで40代の女性、地域では、40代・60代ともに強く感じている。
- 子どもの有無では、女性・子どもがいる人が“男性優遇”を感じる傾向が強い。
- 職業の有無では、“男性優遇”の傾向は、家庭や職場・学校教育の場では、女性の専業主婦・無職・学生が、地域や政治の場では、女性の勤め人・自営業が強いと感じている。
- 子育て世代では、“男性優遇”の傾向は、家庭や地域で、女性の勤め人・自営業が強いと感じている。職場では、男性・専業主婦・無職・学生が“男性優遇”を強く感じている。
- 経年比較では、家庭や職場・地域では、“男性優遇”がやや減少傾向にあり、政治や社会通念やしきたりで“男性優遇”がやや増加傾向にある。

		① 家庭生活 で	② 職場 で	③ 場学 校教 育の	④ ど会会地 ( ) 会会地 ・・域 N自で P主へ O防自 な災治	⑤ 政治 の場 で	⑥ ど習社 で・会 し通 念 たり 慣 な
全体の傾向		やや男性優遇	やや男性優遇	ほぼ平等	やや男性優遇	男性優遇	男性優遇
男性優遇と 感じる傾向が 強い属性	性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性
	年齢	女性の60代以上 20代・30代で男女差 が大きい	女性の60代以上 20代で男女差が大 きい	女性の60代以上 20代で男女差が大 きい	女性の40代・60代 40代・60代で男女差 が大きい	女性の40代	女性の40代 20代・40代で男女差 が大きい
	子どもの 有無	女性・子どもがいる	女性・子どもがいる	女性	女性・子どもがいる	女性・子どもがいる	女性・子どもがいる
	職業の有無	女性・専業主婦・無 職・学生	女性・専業主婦・無 職・学生	女性・専業主婦・無 職・学生	女性・勤め人・自営 業	女性・勤め人・自営 業	女性
	子育て世代	女性・勤め人・自営 業	男性・専業主婦・無 職・学生	女性・専業主婦・無 職・学生	女性・勤め人・自営 業	女性・専業主婦・無 職・学生	女性
経年比較		”男性優遇”がやや 減少傾向	”男性優遇”がやや 減少傾向	変化なし	”男性優遇”がやや 減少傾向	”男性優遇”がやや 増加傾向	”男性優遇”がやや 増加傾向

【男女平等と感じる人の割合】



4 男性が優遇される原因

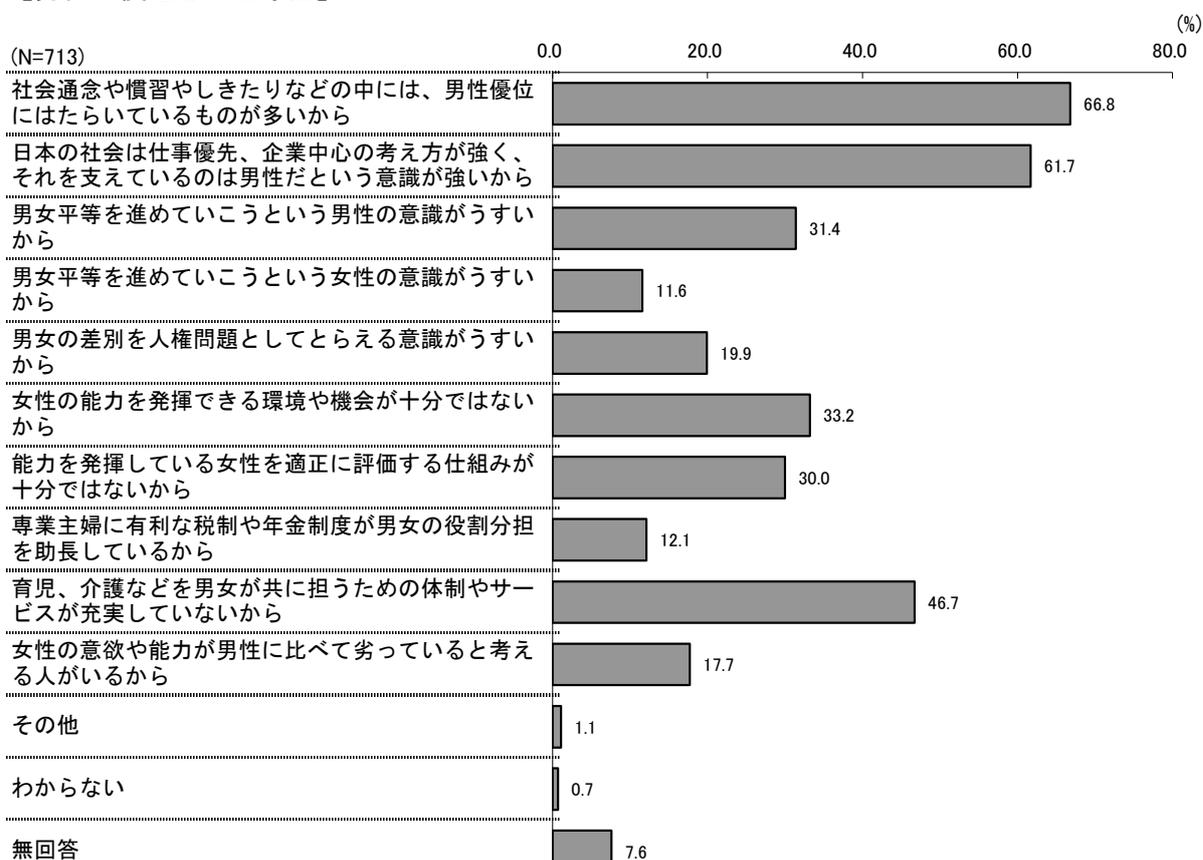
問3-2 問3で「1. 男性が非常に優遇されている」または「2. どちらかといえば男性が優遇されている。」とお答えの方に伺います。

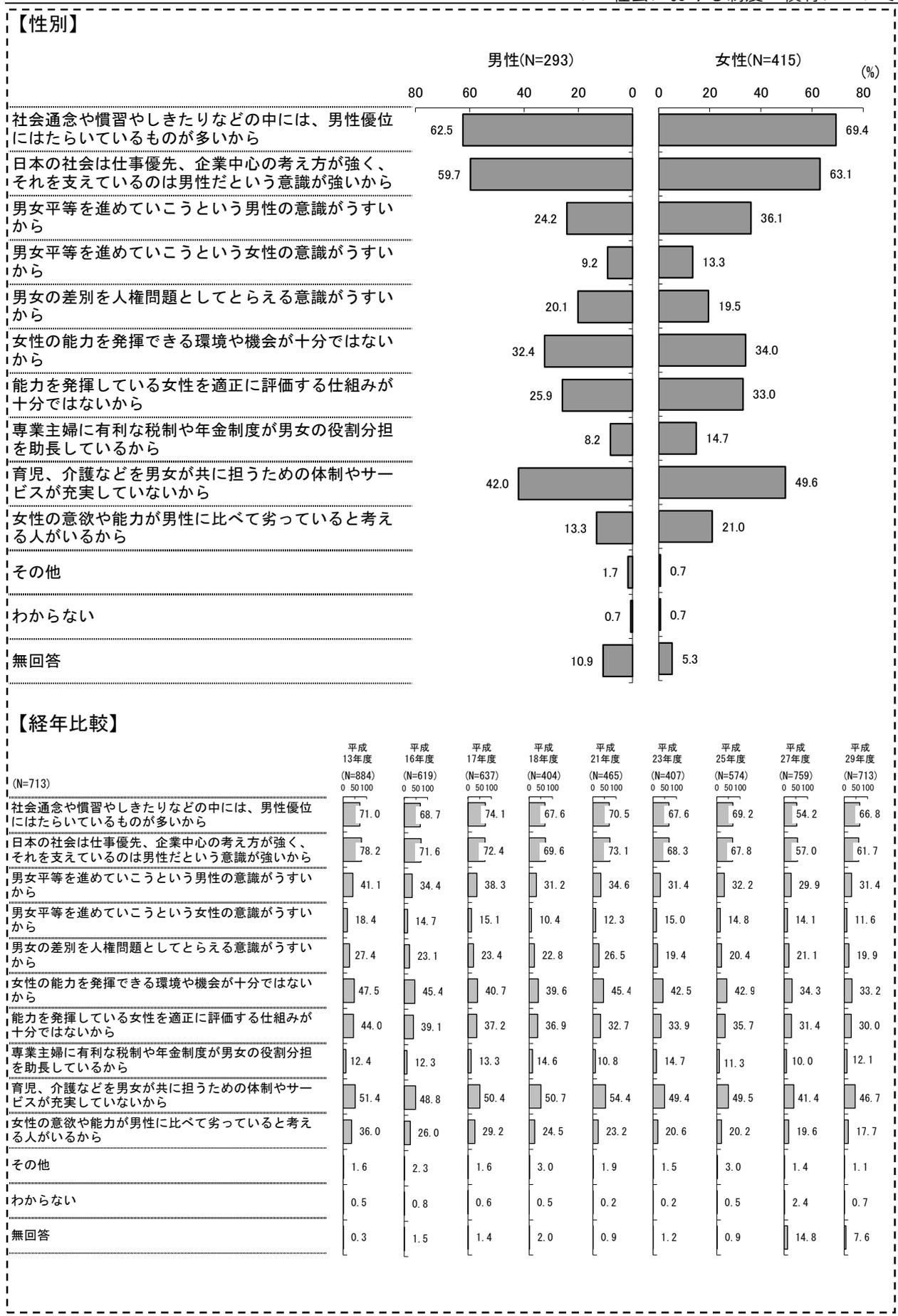
男性が優遇されている原因は何だと思いますか。(あてはまるもの全てに○)

男性が優遇される原因は、“社会通念やしきたり”と“仕事優先社会”が6割以上。

- 男性が優遇される原因をたずねたところ、「社会通念や慣習やしきたりなどの中には、男性優位にはたらいっているものが多いから」が66.8%と最も高く、次いで「日本の社会は仕事優先、企業中心の考え方が強く、それを支えているのは男性だ」という意識が強いから」が61.7%、「育児、介護などを男女が共に担うための体制やサービスが充実していないから」が46.7%と続いている。“男女平等の意識”に関する項目よりも日本古来の“社会のあり方・社会通念”に関する項目が上位となっている。
- 性別にみると、「男女の差別を人権問題としてとらえる意識がうすいから」は、男性の方が0.6ポイント女性より上回っているが、その他の項目では、女性の方が高く、「男女平等を進めていこう」という男性の意識がうすいから」では、男性と11.9ポイントの差がある。
- 経年比較を見ると、平成27年度まで減少傾向にあったが、“社会の在り方・社会通念”に関する項目が増加している。

【男性が優遇される原因】





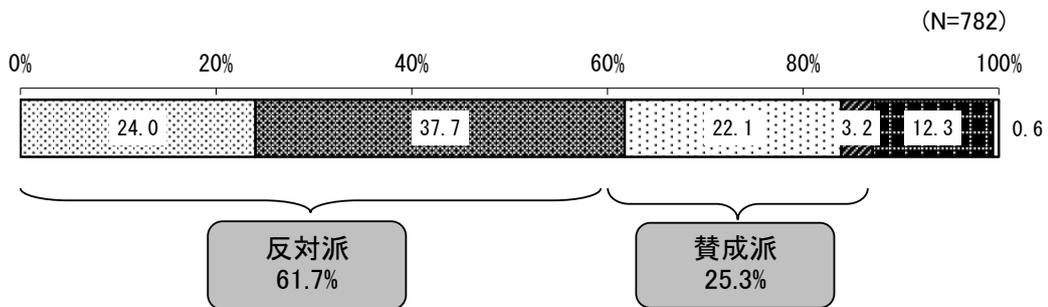
5 男女の役割を固定的に考えることに関する意識

問4 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」というような男女の役割を固定的に考えることについて、どのように思いますか。(1つに○)

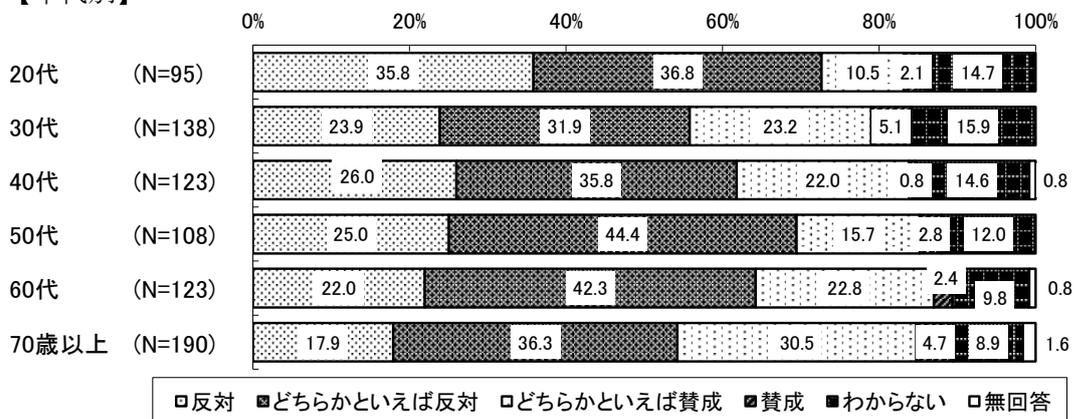
“固定的性別役割の考え方に反対”は6割。

- 男女の役割を固定的に考えることについてたずねたところ、「反対」が24.0%、「どちらかといえば反対」が37.7%で、合わせた“反対派”が61.7%と6割を占めている。一方、「賛成」が3.2%、「どちらかといえば賛成」が22.1%で、合わせた“賛成派”は25.3%となっている。
- 年代別にみると、“反対派”では、20代が72.6%で最も高くなっている。40代、50代、60代では6割を超えている。“賛成派”では、70歳以上が35.2%と高くなっている。
- 性別に得点をみると、男性が0.49点、女性が0.78点で、女性の方が“反対”の傾向が強い。
- 性・年代別に得点をみると、20代で男女ともに“反対”の傾向が強くなっている。
- 子どもの有無別にみると、子どもがいる男性では0.37点、子どもはいる男性では0.81点と、子どもはいる男性の方が“反対”の意識が高くなっている。
- 子育て世代別にみると、女性の勤め人・自営業が0.96点と高くなっている。専業主婦・無職・学生では、男女の差が大きくなっている。
- 経年比較をみると、「反対」と「どちらかといえば反対」を合わせた“同感しないほう”の割合は、増加傾向にある。

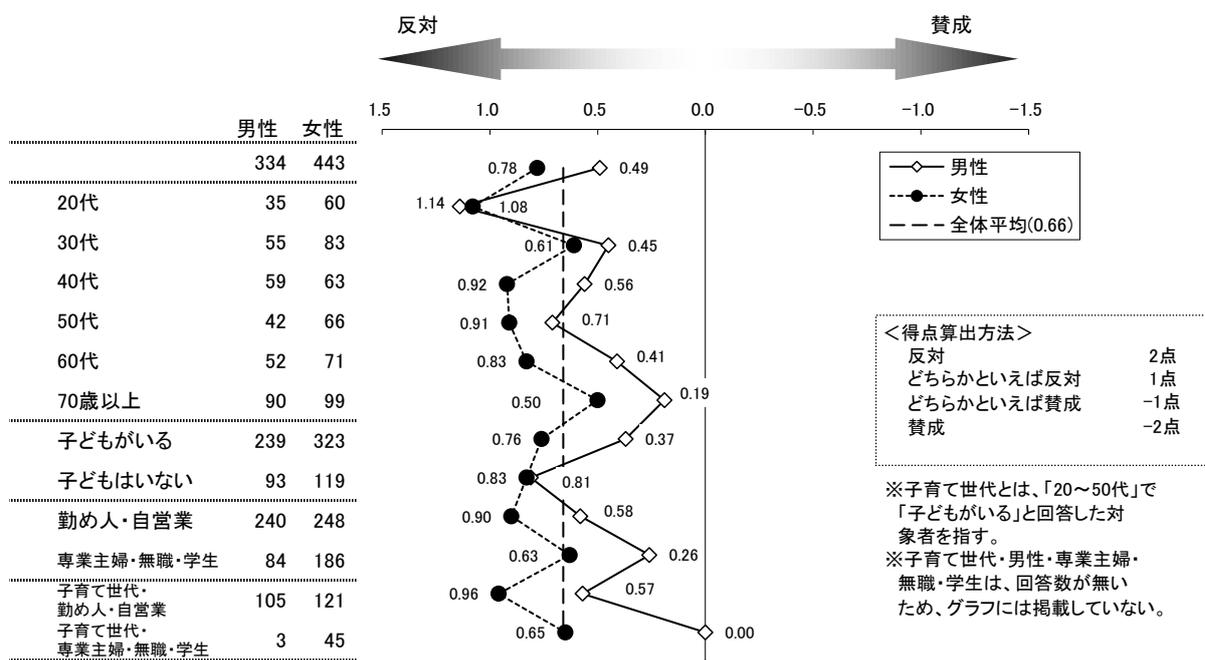
【男女の役割を固定的に考えることについて】



【年代別】

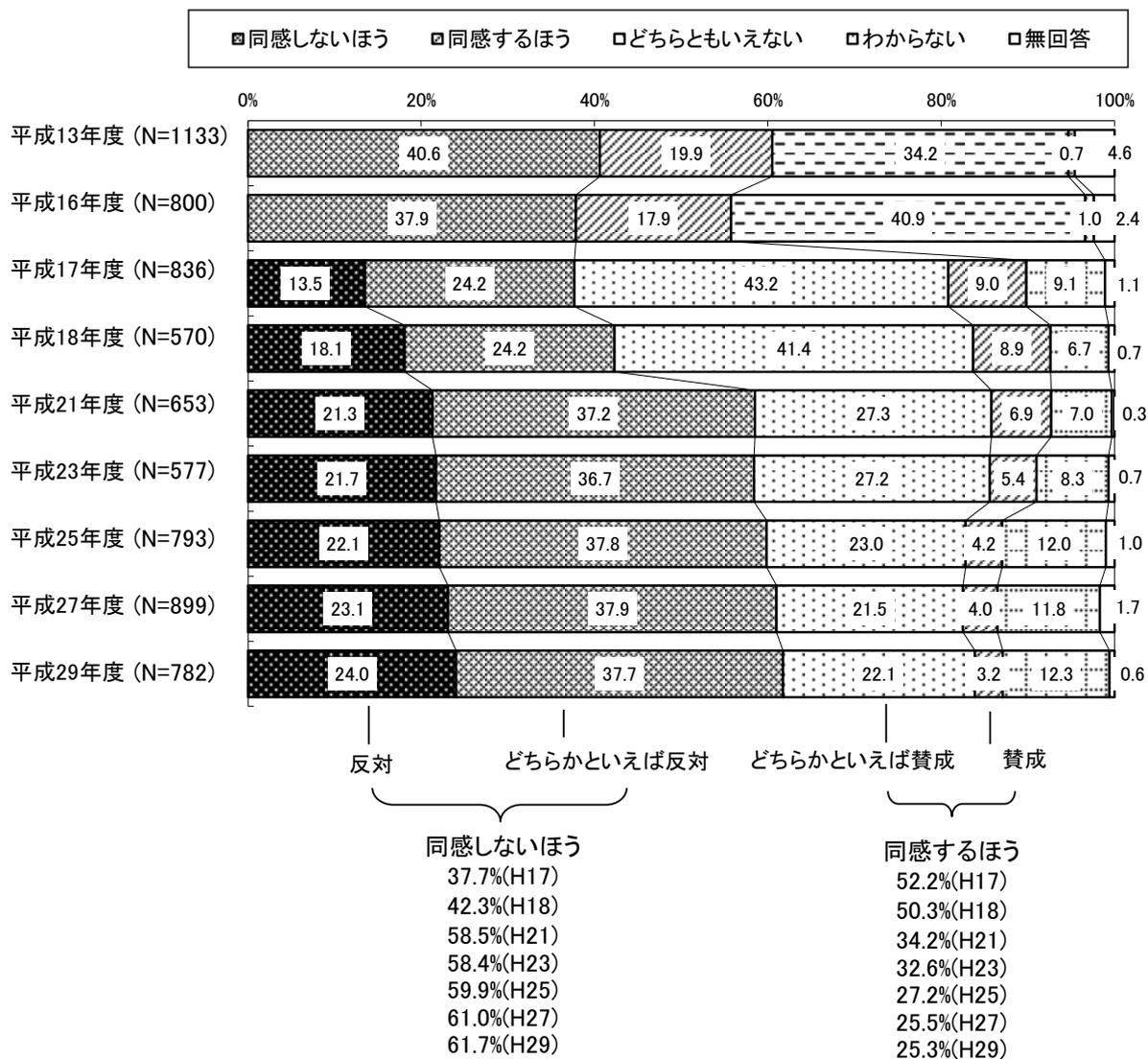


【属性別】



【経年比較】

「男は仕事、女は家庭」という考え方がありますが、あなたはこの考え方に同感するほうですか、それとも同感しないほうですか



※平成17、18、21、23、25、27、29年度において、「同感しないほう」は「どちらかといえば反対」「反対」の計、「同感するほう」は「賛成」「どちらかといえば賛成」の計とする。  
 なお、「どちらともいえない」は平成17、18、21、23、25、27、29年度では選択肢にない。

6 仕事、家事、育児、介護への男女のかかわりかたについて

問4-2 仕事、家事、育児、介護について男女がどのようにかかわるべきだと思いますか。  
(1つに〇)

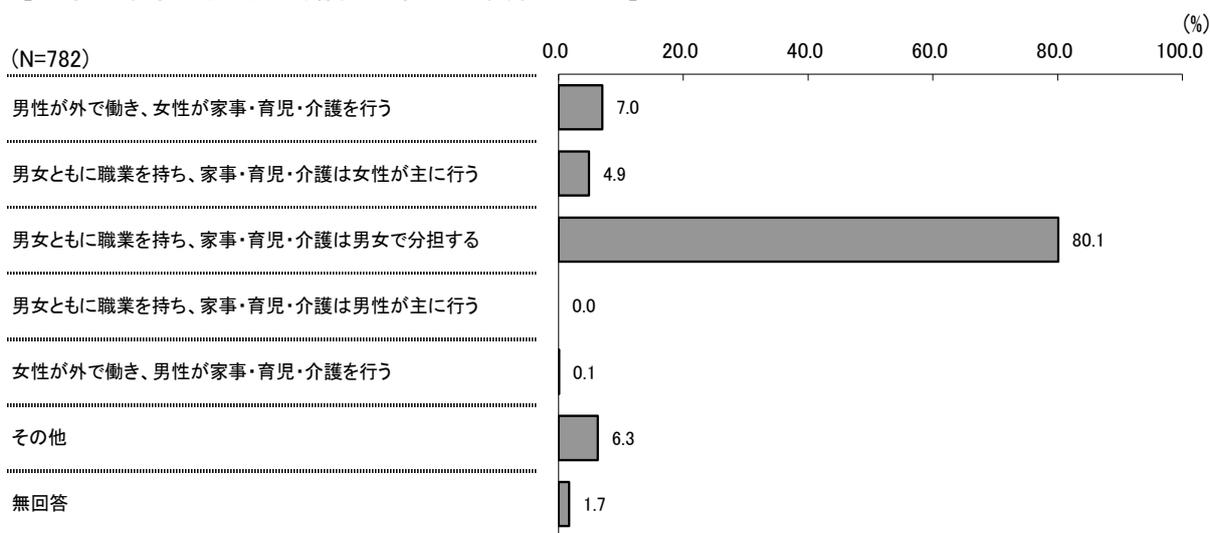
**仕事、家事、育児、介護への男女のかかわりかたは、“すべて男女で分担”が8割。**

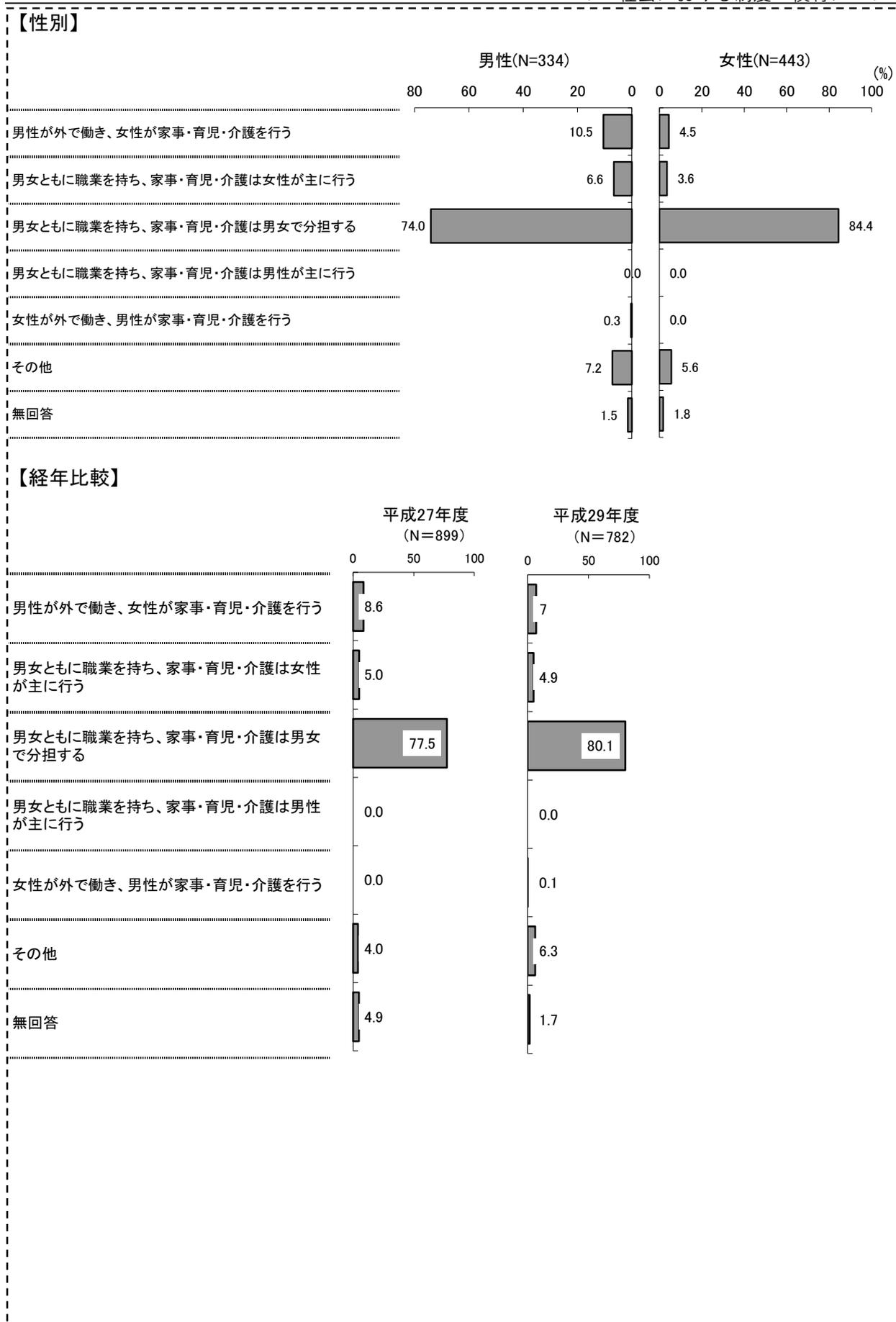
■仕事、家事、育児、介護への男女のかかわりかたについてたずねたところ、「男女ともに職業を持ち、家事・育児・介護は男女で分担する」が80.1%と突出して最も高く、他はすべて1割に満たなかった。

■性別にみると、「男女ともに職業を持ち、家事・育児・介護は男女で分担する」は、男性が74.0%、女性が84.4%で、女性の方が高くなっている。「男性が外で働き、女性が家事・育児・介護を行う」と「男女ともに職業を持ち、家事・育児・介護は女性が主に行う」を合わせた“家事・育児・介護を女性が行う”は、男性が17.1%、女性が8.1%と男性のほうが上回っており、男女間に意識の差が見られる。

■経年比較をみると、「男女ともに職業を持ち、家事・育児・介護は男女で分担する」は、前回調査よりも2.6ポイント上回っている。

【仕事、家事、育児、介護への男女の関わりかた】





## 2 男女共同参画に関する教育・学習について

### 1 人権の尊重、男女平等を推進する教育

問5 あなたは、人権の尊重、男女平等を推進する教育を主にどこで行うべきだと思いますか。  
(1つに○)

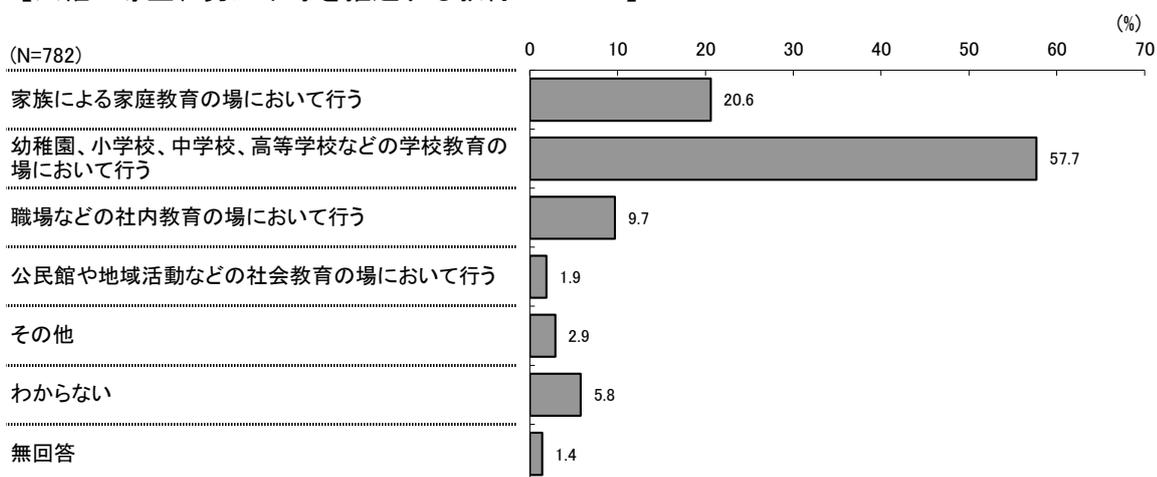
“学校教育”は5割以上、“家庭教育”は2割。

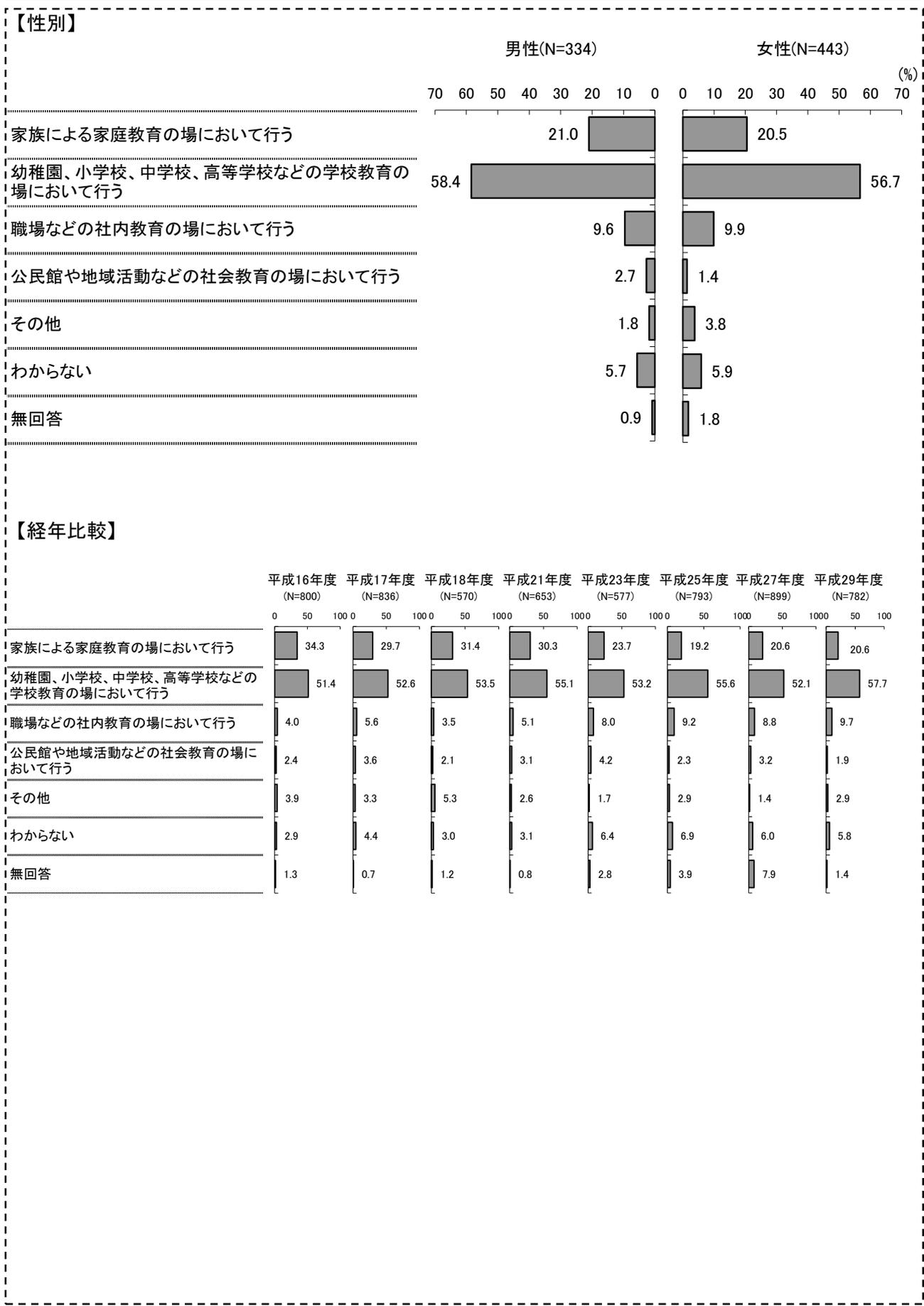
■人権尊重、男女平等を推進する教育をどこで行うべきかをたずねたところ、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校などの学校教育の場において行う」が57.7%と最も高く、「家族による家庭教育の場において行う」が20.6%と続いている。

■性別にみると、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校などの学校教育の場において行う」は、男性58.4%、女性56.7%と男性の方がやや高くなっている。

■経年比較を見ると、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校などの学校教育の場において行う」と、「職場などの社内教育の場において行う」が、過去と比べ、最も高くなっている。

#### 【人権の尊重、男女平等を推進する教育について】





### 3 男女間の暴力やセクシュアル・ハラスメントについて

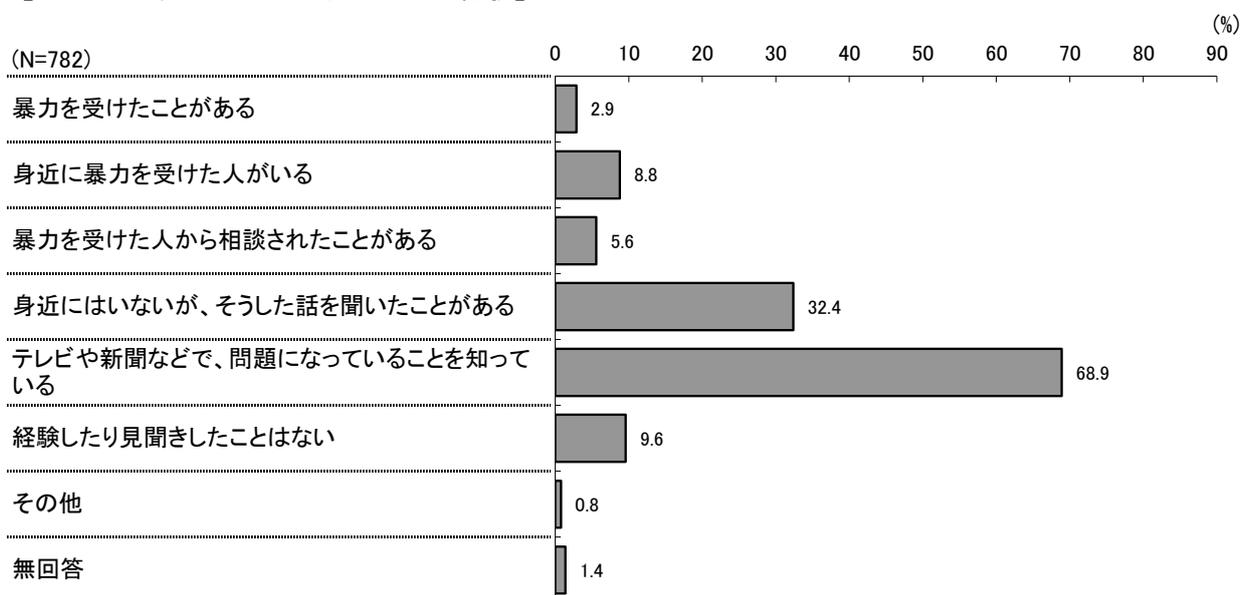
#### 1 ドメスティック・バイオレンスの経験

問6 過去1年間に、「夫や妻・恋人など親しい間柄にある男女間の暴力」（ドメスティック・バイオレンス）について、経験したり見聞きしたことがありますか。（あてはまるもの全てに○）

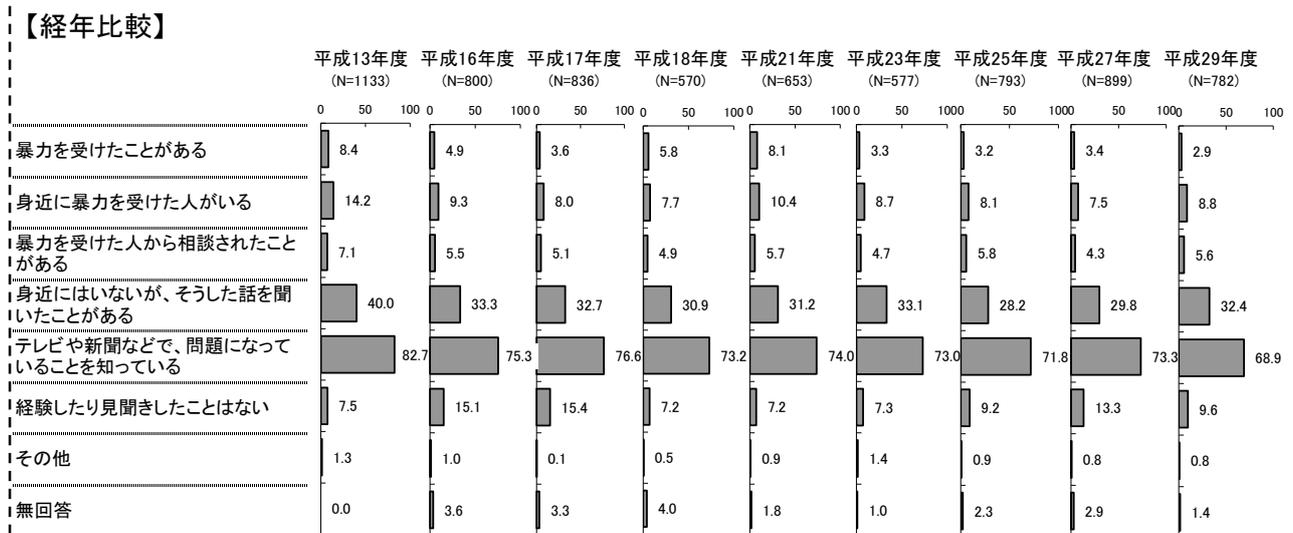
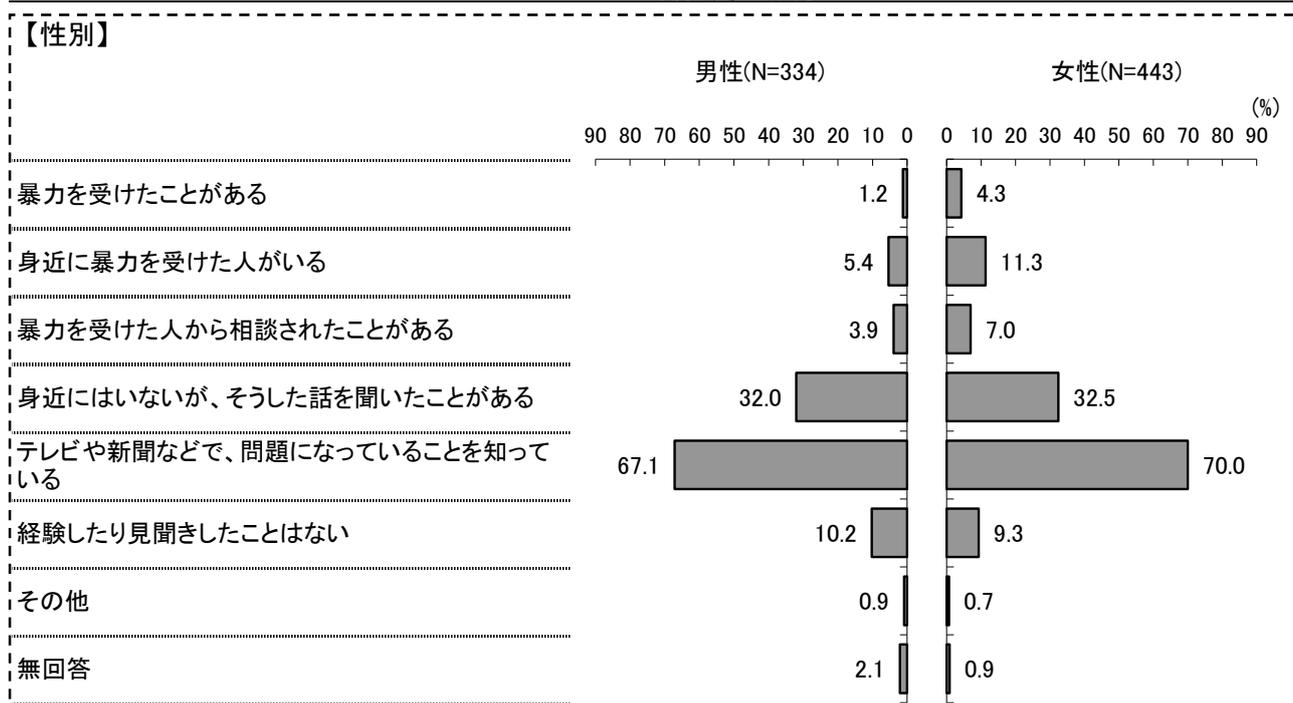
過去1年間に、女性の4.3%がドメスティック・バイオレンスを経験。

- ドメスティック・バイオレンスについてたずねたところ、「暴力を受けたことがある」は2.9%、「身近に暴力を受けた人がある」は、8.8%、「暴力を受けた人から相談されたことがある」は5.6%となっている。また、68.9%が「テレビや新聞などで、問題になっていることを知っている」と回答しており、「経験したり見聞きしたことはない」は9.6%となっている。
- 性別にみると、女性の4.3%が「暴力を受けたことがある」、11.3%が「身近に暴力を受けた人がある」と回答している。
- 経年比較をみると、平成29年度は「暴力を受けたことがある」では、最も低い割合となっているものの、「身近に暴力を受けた人がある」と「暴力を受けた人から相談されたことがある」では、平成27年度よりも若干高くなっている。

【ドメスティック・バイオレンスの経験】



3 男女間の暴力やセクシュアル・ハラスメントについて



※平成21年までの調査は、「これまでの経験」を調査対象としていたが、平成23年度からの調査は、「過去1年間の経験」を調査対象としている

## 2 ドメスティック・バイオレンスをなくすために重要なこと

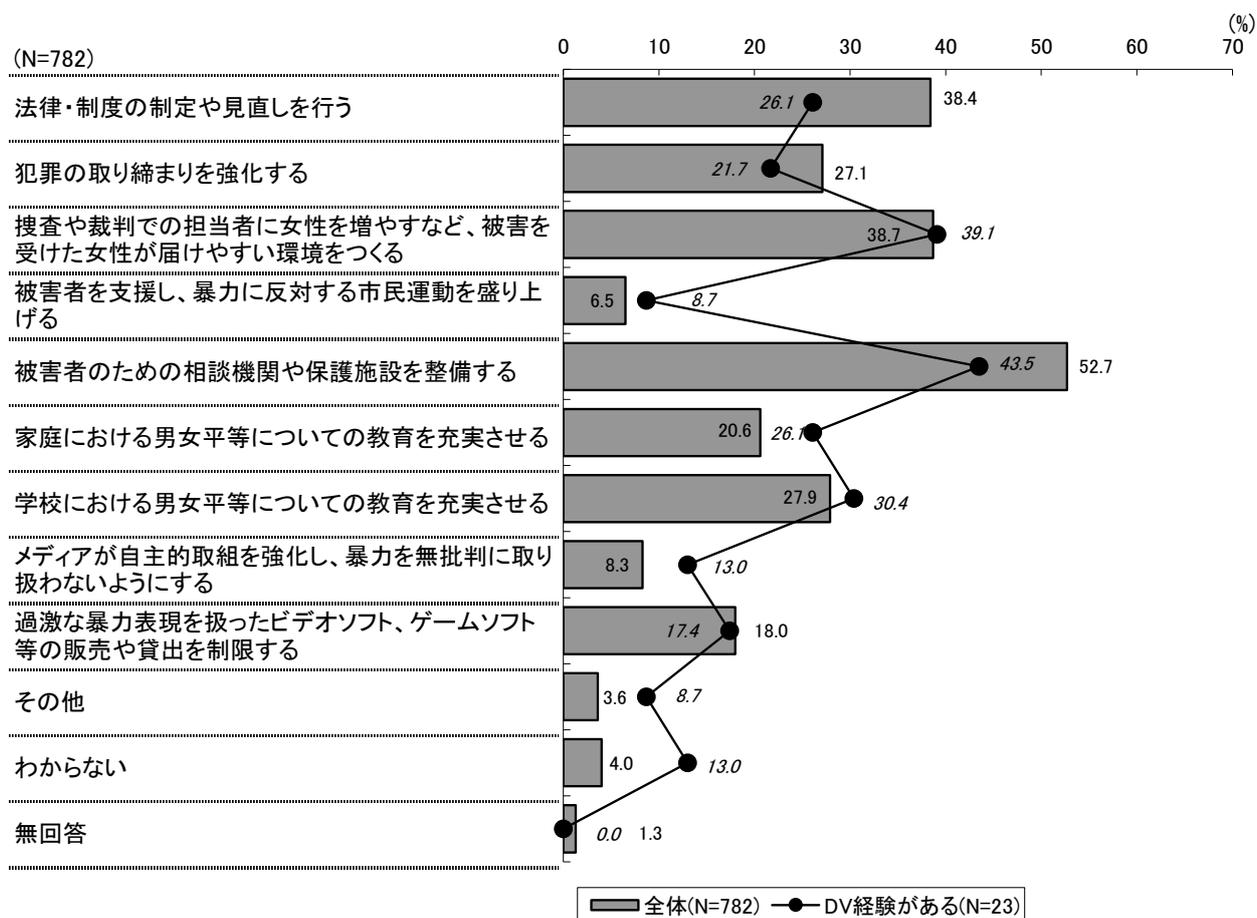
問7 「夫や妻・恋人など親しい間柄にある男女間の暴力」(ドメスティック・バイオレンス)をなくすためには、どうしたらよいとお考えになりますか。あなたが、重要であるとお考えのものを選びください。(3つまでに○)

“被害者の保護の環境整備”、“法律・制度の見直し”を望む声が多い。

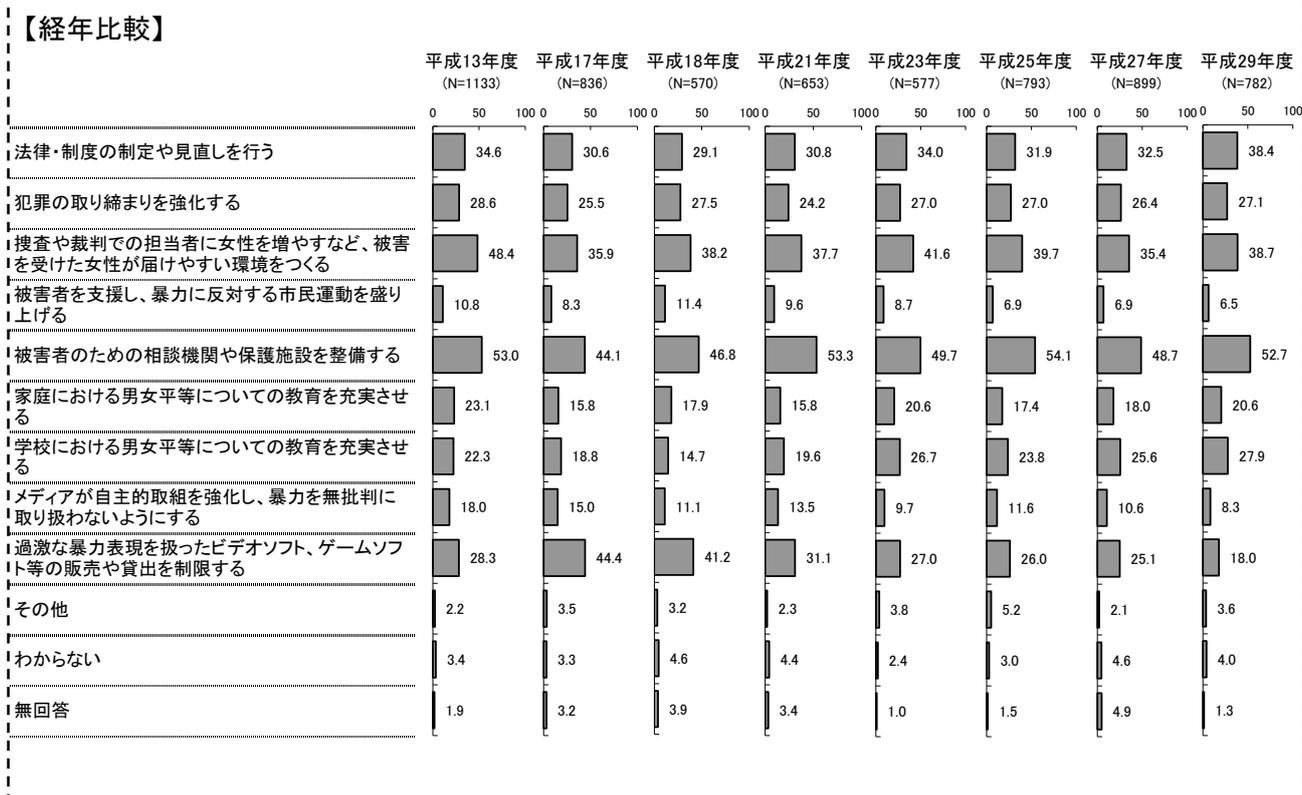
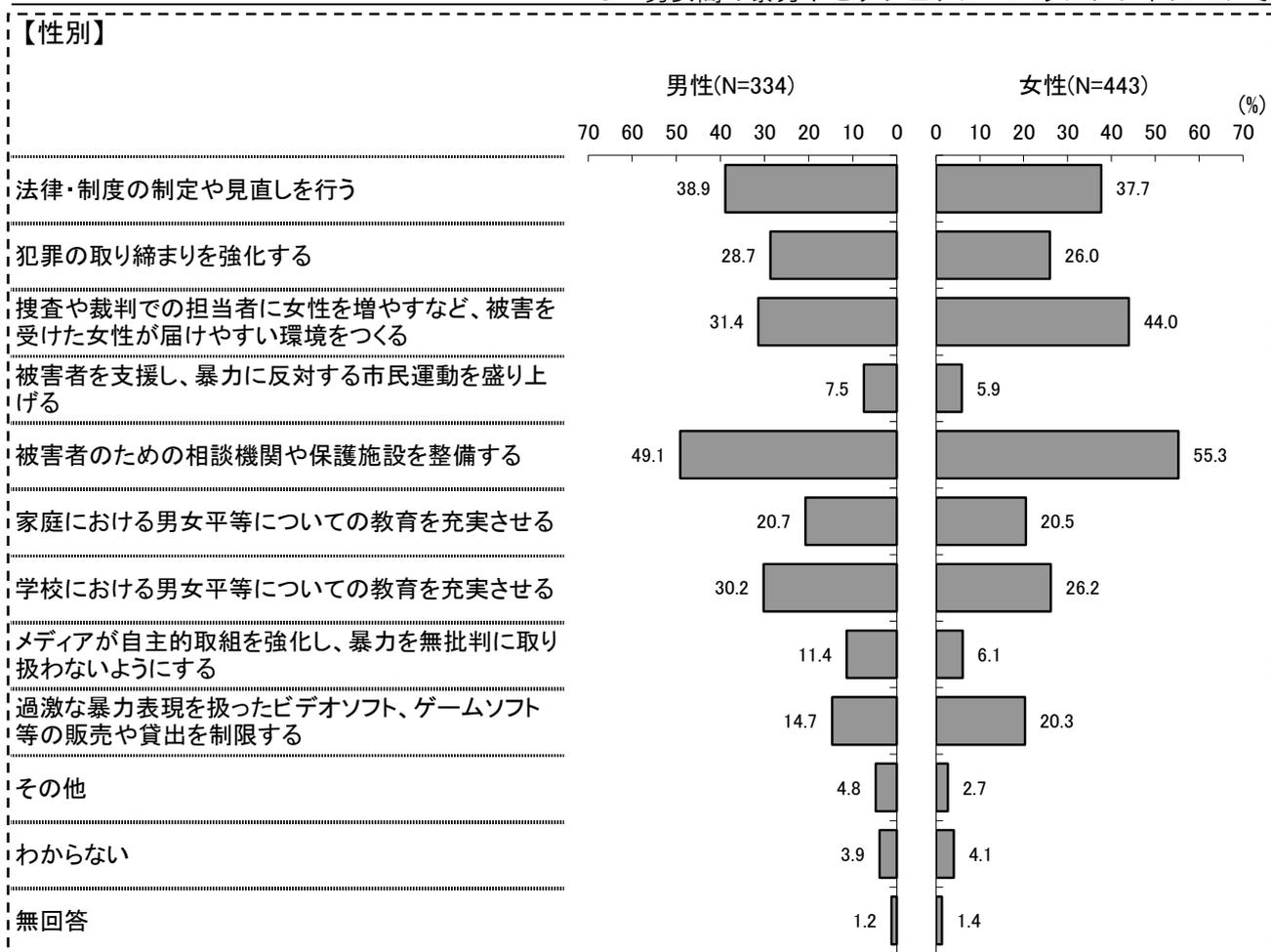
- ドメスティック・バイオレンスをなくすために重要なことについてたずねたところ、「被害者のための相談機関や保護施設を整備する」が52.7%と最も高く、次いで、「捜査や裁判での担当者に女性を増やすなど、被害を受けた女性が届けやすい環境をつくる」が38.7%、「法律・制度の制定や見直しを行う」が38.4%と続いている。
- 問6で“ドメスティック・バイオレンスを受けた経験がある”と回答した23人をみると、「被害者のための相談機関や保護施設を整備する」(43.5%)が最も高くなっているが、全体と比べると9.2ポイント低くなっている。「法律・制度の制定や見直しを行う」(26.1%)では、全体が4割弱に対し、2割台と低くなっている。
- 性別にみると、男女とも「被害者のための相談機関や保護施設を整備する」(男性49.1%、女性55.3%)が高く、女性では5割を超えている。「捜査や裁判での担当者に女性を増やすなど、被害を受けた女性が届けやすい環境をつくる」は、男性が31.4%、女性が44.0%で、女性の方が12.6ポイント高い。
- 経年比較では、「法律・制度の制定や見直しを行う」と、「学校における男女平等についての教育を充実させる」が過去最も高くなっている。

3 男女間の暴力やセクシュアル・ハラスメントについて

【ドメスティック・バイオレンスをなくすために重要なこと】



3 男女間の暴力やセクシュアル・ハラスメントについて



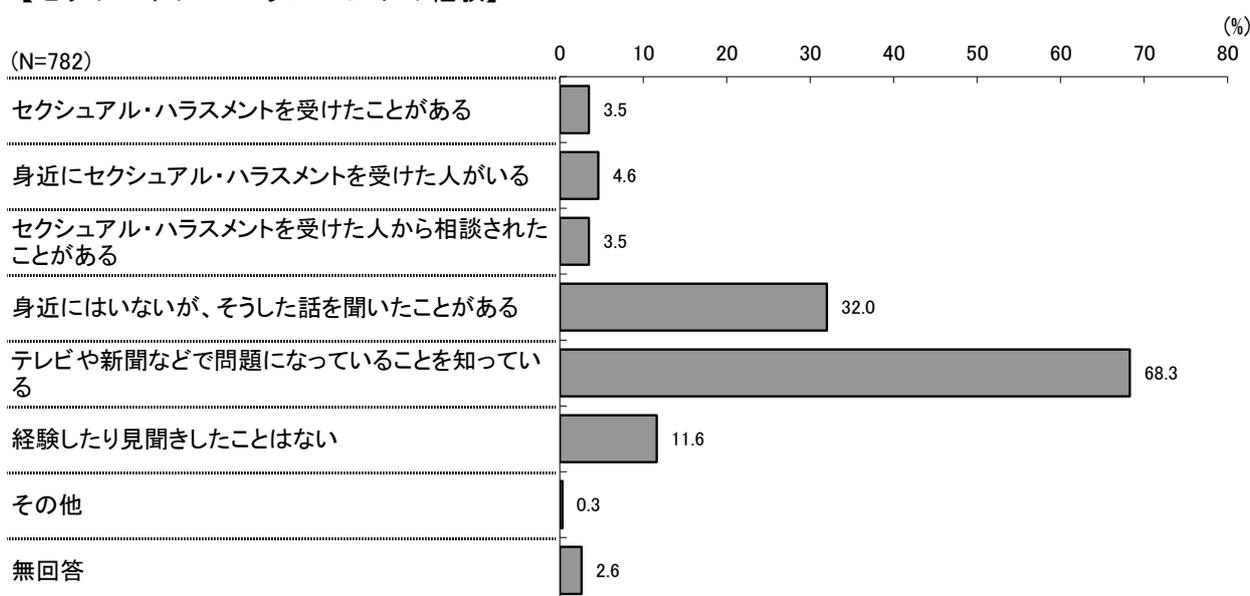
## 3 セクシュアル・ハラスメントの経験

問8 過去1年間に、セクシュアル・ハラスメント(セクハラ・性的嫌がらせ)について経験したり、見聞きしたことがありますか。(あてはまるもの全てに○)

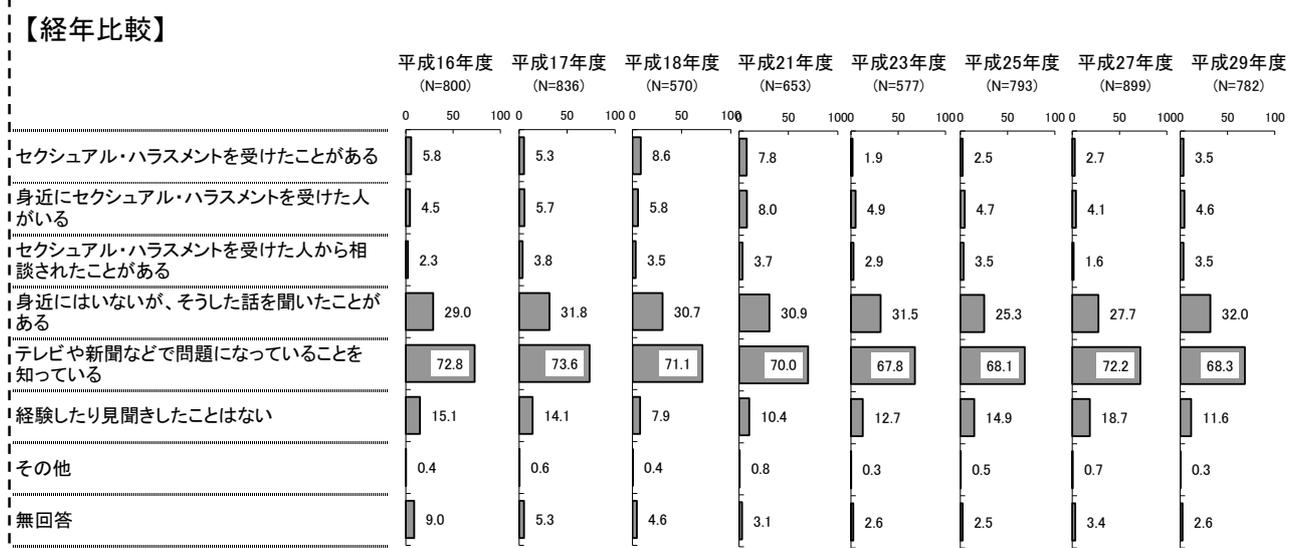
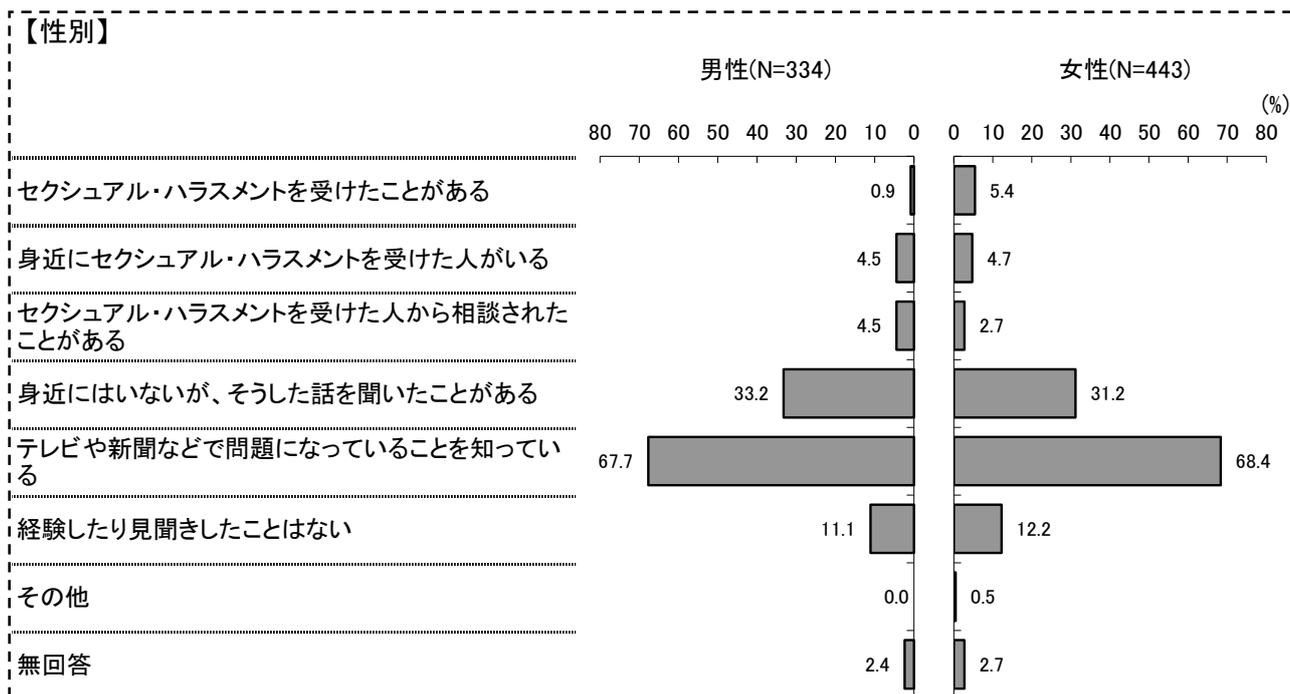
過去1年間に、女性の5.4%がセクシュアル・ハラスメントを経験。

- セクシュアル・ハラスメントについてたずねたところ、「セクシュアル・ハラスメントを受けたことがある」は3.5%、「身近にセクシュアル・ハラスメントを受けた人がいる」は4.6%、「セクシュアル・ハラスメントを受けた人から相談されたことがある」は3.5%となっている。また、「テレビや新聞などで問題になっていることを知っている」と回答した人は68.3%、「身近にはいないが、そうした話を聞いたことがある」は32.0%、「経験したり見聞きしたことはない」は11.6%となっている。
- 性別にみると、女性の5.4%が「セクシュアル・ハラスメントを受けたことがある」、4.7%が「身近にセクシュアル・ハラスメントを受けた人がいる」と回答している。「セクシュアル・ハラスメントを受けた人から相談されたことがある」では、男性4.5%、女性2.7%で、男性が上回っている。
- 経年比較を見ると、「セクシュアル・ハラスメントを受けたことがある」は、平成25年度以降増加の傾向にある。

【セクシュアル・ハラスメントの経験】



3 男女間の暴力やセクシュアル・ハラスメントについて



※平成21年までの調査は、「これまでの経験」を調査対象としていたが、平成23年度からの調査は、「過去1年間の経験」を調査対象としている

## 4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

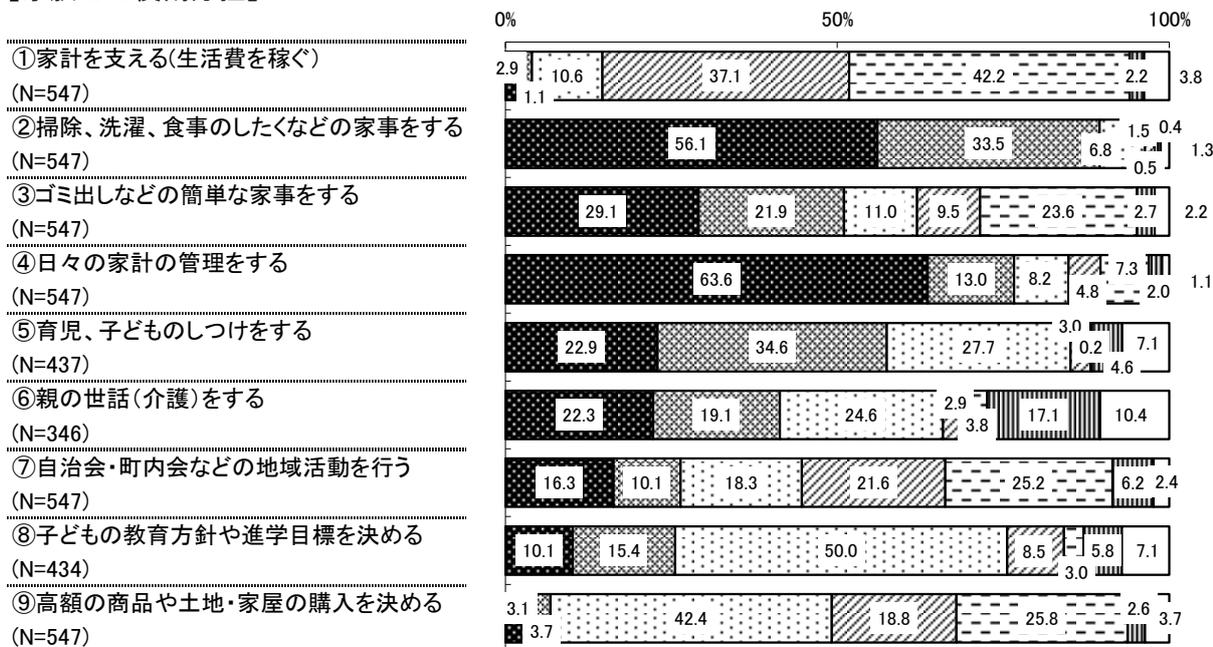
### 1 家庭での役割分担

問9 現在、配偶者(事実婚を含む)のいる方に伺います。あなたのご家庭では、次にあげる家庭での役割を、主にどなたが担っていますか。(それぞれ1つに〇)

**男性が家計を支え、女性が家事や家計の管理を行う傾向が顕著となっている。**

- 家庭での役割分担をたずねたところ、“④日々の家計の管理をする”で「主に妻」が63.6%、“②掃除、洗濯、食事のしたくなどの家事をする”で「主に妻」が56.1%と過半数を超えている。また、“③ゴミ出しなどの簡単な家事をする”、“⑤育児、子どものしつけをする”でも、「主に妻」と「主に妻だが夫も分担」を合わせた“妻主体”が半数を超えている。“③ゴミ出しなどの簡単な家事をする”は、「主に夫」も23.6%と比較的高い。
- 一方、“①家計を支える(生活費を稼ぐ)”では、「主に夫」が42.2%と4割を超え、「主に夫だが妻も分担」と合わせた“夫主体”は8割近くを占めている。
- “⑥親の世話(介護)をする”では、“妻主体”が41.4%と高くなっている。
- “⑧子どもの教育方針や進学目標を決める”では、「夫と妻が同程度」が50.0%で半数を占めている。
- “⑨高額の商品や土地・家屋の購入を決める”では、「夫と妻が同程度」が42.4%と最も高い割合となっているが、“夫主体”が44.6%と高く、“妻主体”は6.8%と低くなっている。

#### 【家族での役割分担】



※⑤⑥⑧は、「同居の子どもや親はいない」を除く回答ベース

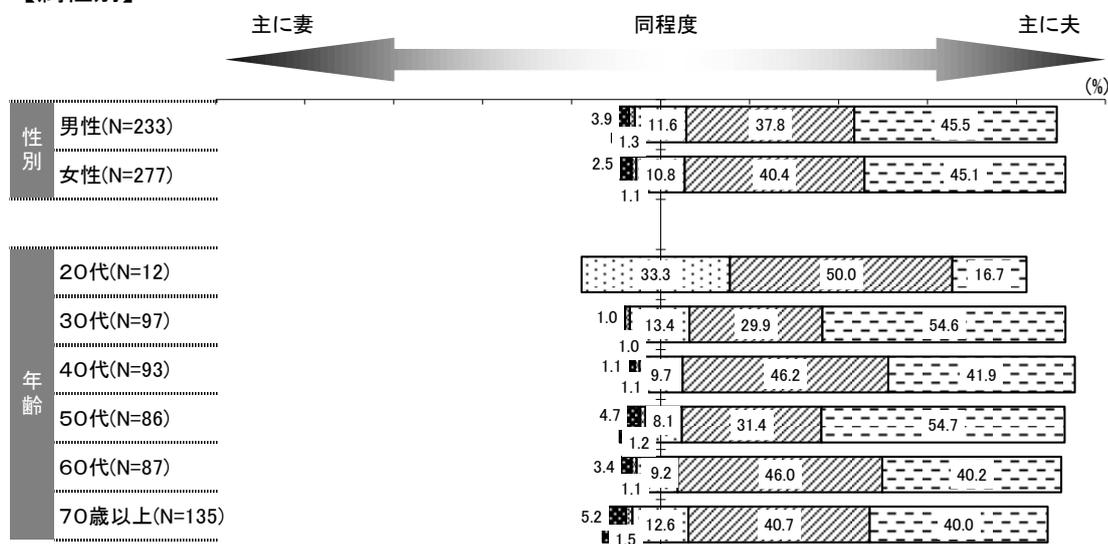
4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

① 家計を支える(生活費を稼ぐ)

30代以上は“夫主体”が8割以上。

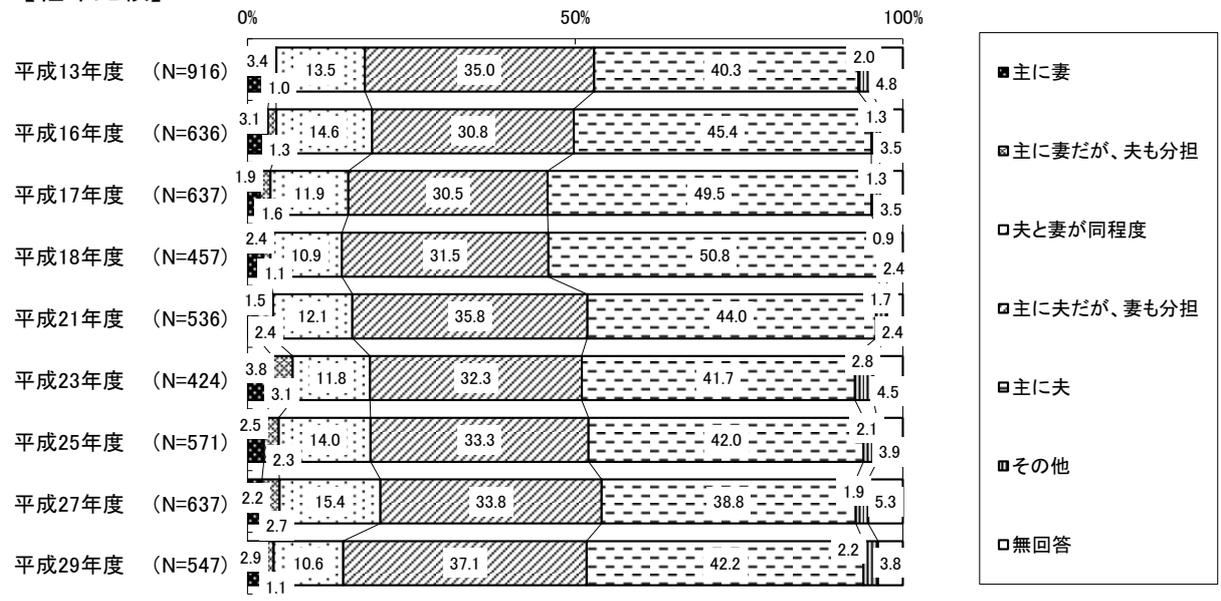
- 性別にみると、男性、女性とも「主に夫」が4割以上となっており、「主に夫」の傾向にある。
- 年代別にみると、“夫主体”（「主に夫」+「主に夫だが、妻も分担」）の30代以上で8割を超えており、40代が88.1%と最も高くなっている。20代では、「夫と妻が同程度」が33.3%と高くなっている。
- 経年比較をみると、「主に夫だが、妻も分担」は、平成25年度以降増加傾向にあり、最も高くなっている。

【属性別】



■主に妻 □主に妻だが、夫も分担 □夫と妻が同程度 □主に夫だが、妻も分担 □主に夫

【経年比較】



■主に妻  
□主に妻だが、夫も分担  
□夫と妻が同程度  
□主に夫だが、妻も分担  
□主に夫  
□その他  
□無回答

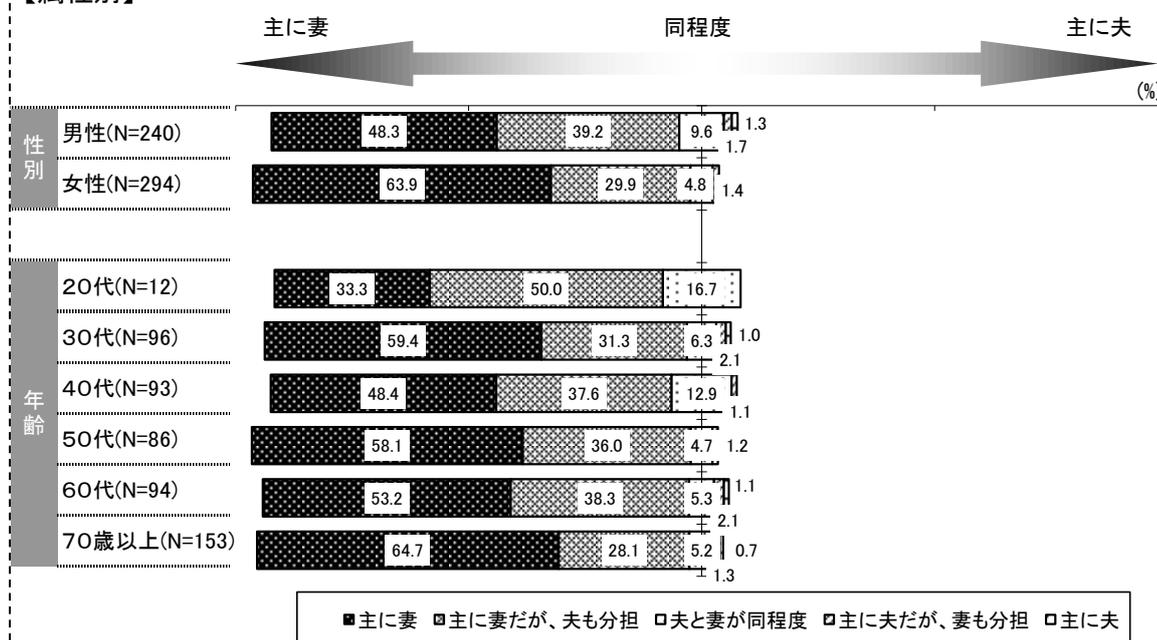
4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

② 掃除、洗濯、食事のしたくなどの家事をする

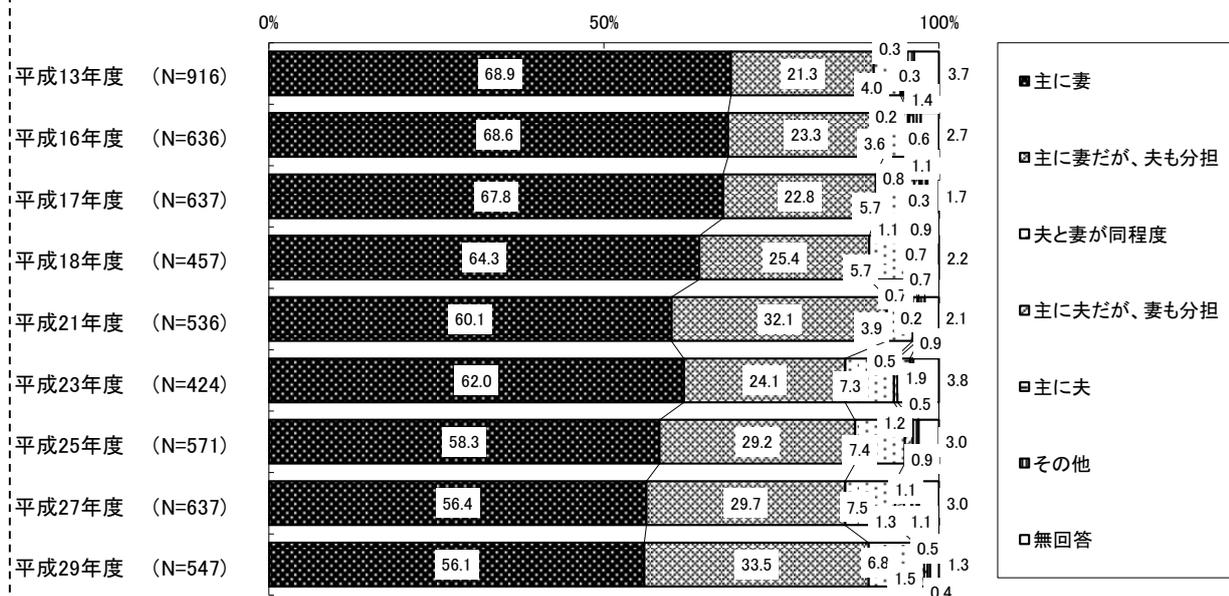
70歳以上は「主に妻」が6割以上。

- 性別にみると、「主に妻」では、女性が63.9%、男性が48.3%で女性の方が高く、「主に妻だが、夫も分担」では、男性が39.2%、女性が29.9%で、男性の方が高くなっている。
- 年代別にみると、「主に妻」では、70歳代が64.7%と最も高く、6割を超えている。20代では、「主に妻だが、夫も分担」が50.0%で半数を占めている。
- 経年比較をみると、「主に妻」は、平成23年度で若干増加したものの、25年度からは再び減少傾向にあり、「主に妻だが、夫も分担」は増加傾向にある。

【属性別】



【経年比較】



4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

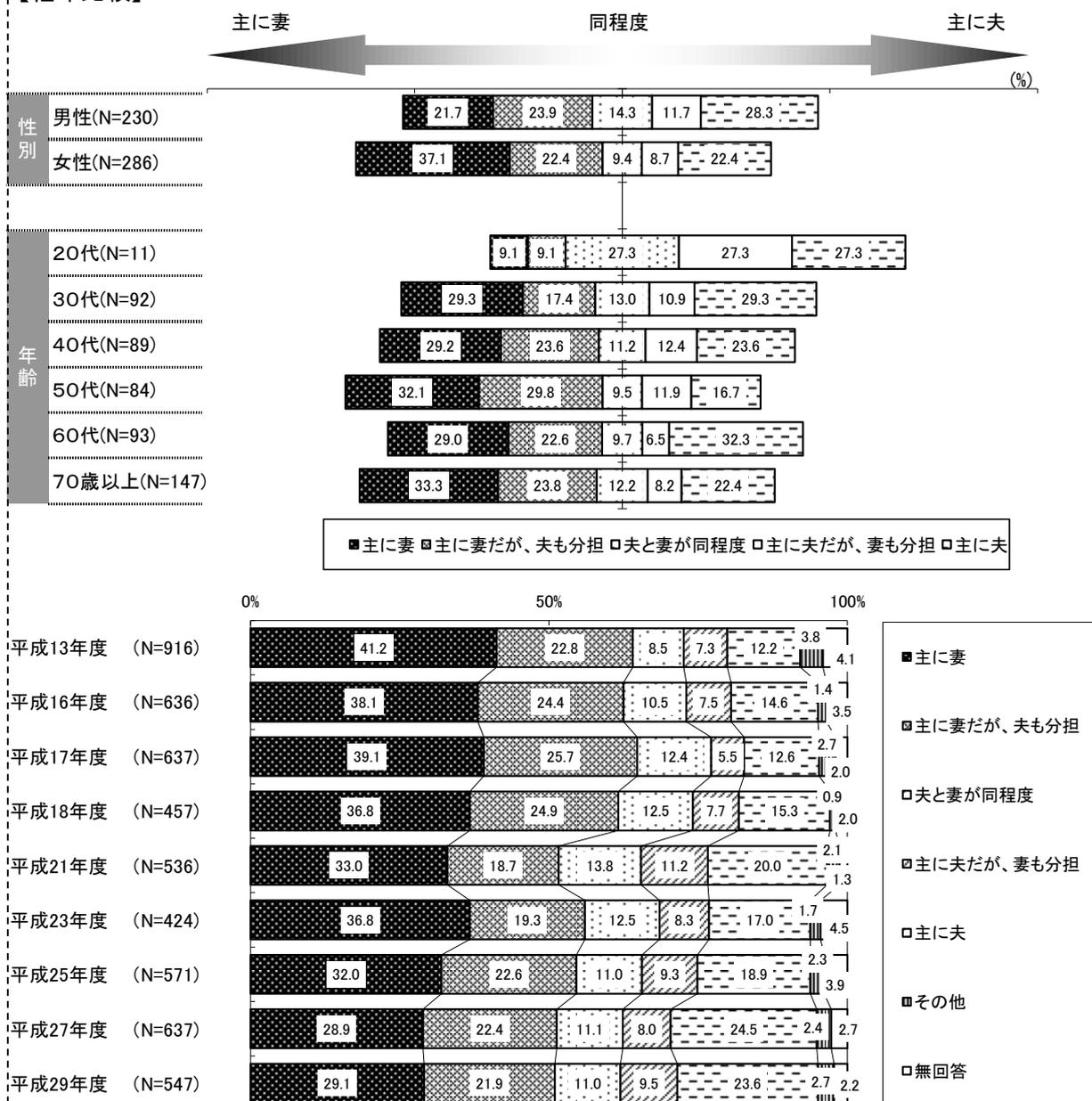
③ ゴミ出しなどの簡単な家事をする

“妻主体”は女性で約6割を占めている。

- 性別にみると、「主に妻」では、女性が37.1%と、男性の21.7%よりも高く、「主に夫」では、男性が28.3%と、女性の22.4%よりも高くなっており、男女間で認識の差がみられる。
- 年代別にみると、20代を除く各年代では、“妻主体”（「主に妻」＋「主に妻だが、夫も分担」）が、“夫主体”（「主に夫」＋「主に夫だが、妻も分担」）よりも高くなっている。20代では、“夫主体”が54.6%と“妻主体”を上回っている。
- 経年比較をみると、平成25年度以降、“妻主体”は徐々に減少し、“夫主体”が増加傾向にある。

【属性別】

【経年比較】

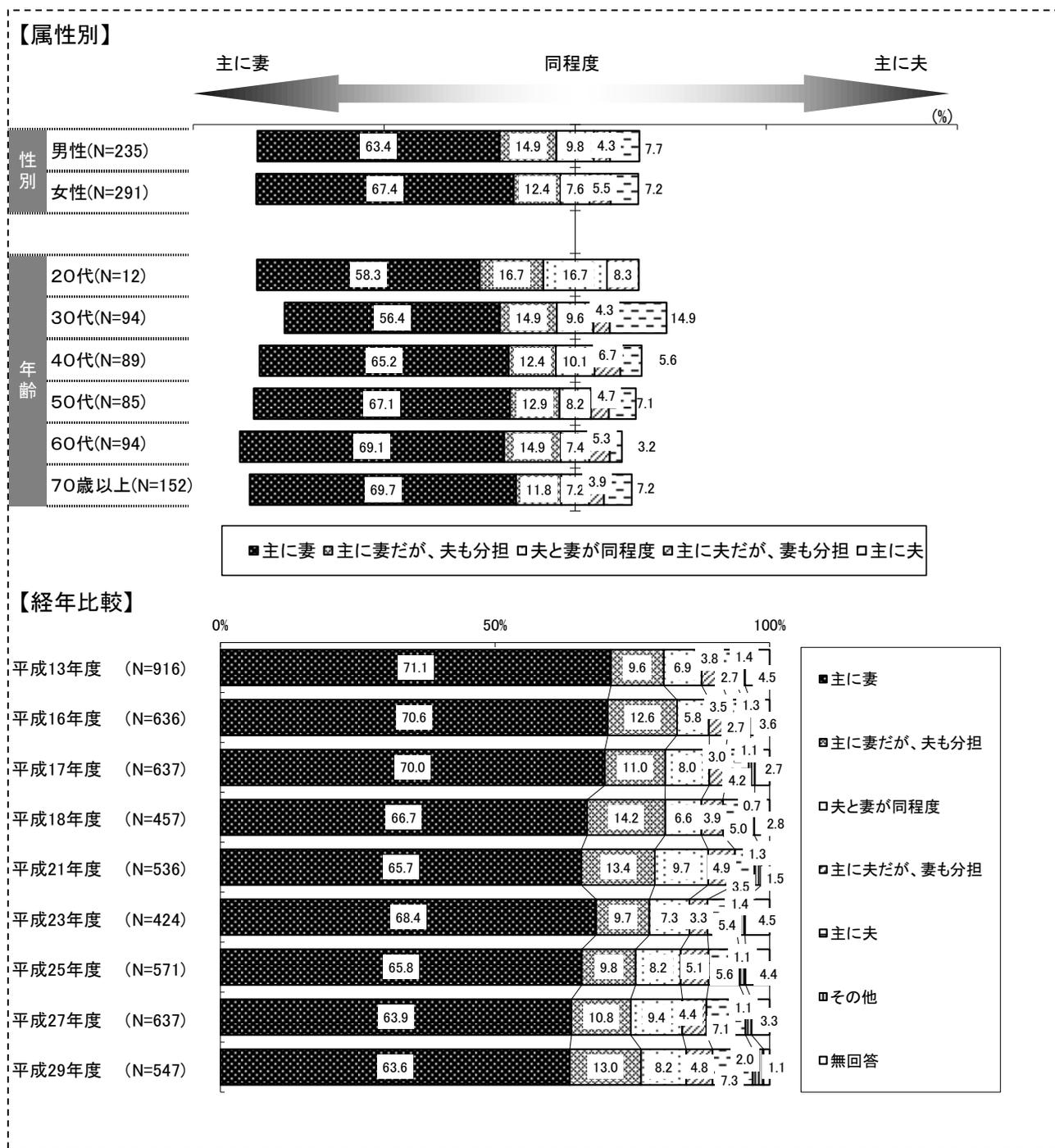


4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

④ 日々の家計を管理する

すべての年代で「妻主体」が7割以上。

- 性別にみると、「主に妻」では、女性で67.4%と、男性の63.4%を上回っているものの、男女間にあまり大きな違いは見られない。
- 年代別にみると、「主に妻」では、年代が上がるにつれて割合が高く、70歳以上が最も高い。
- 経年比較をみると、「主に妻」は、平成25年度以降減少傾向にある。



4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

⑤ 育児、子どものしつけをする

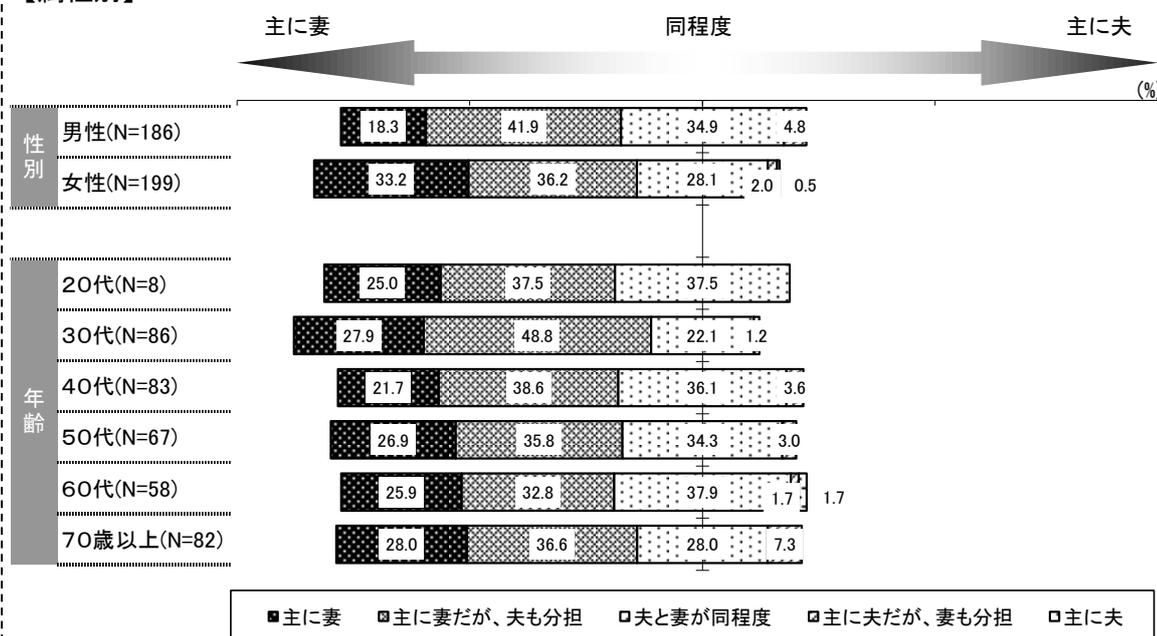
30代では“妻主体”の割合が7割以上。

■性別にみると、「主に妻」では、女性で33.2%と、男性の18.3%を大きく上回っており、男女間の認識の差がみられる。

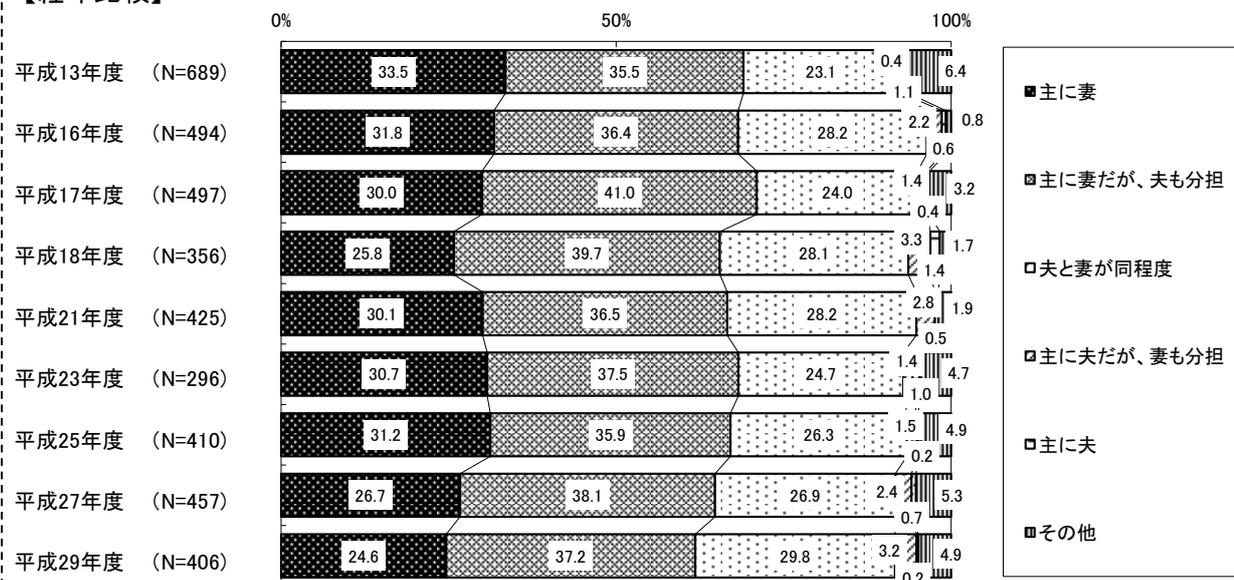
■年代別にみると、「主に妻」では、どの年代も大きな差はないが、“妻主体”（「主に妻」＋「主に妻だが、夫も分担」）では、30代が76.7%と高くなっている。

■経年比較をみると、“妻主体”の割合は平成25年度以降減少傾向にある。

【属性別】



【経年比較】

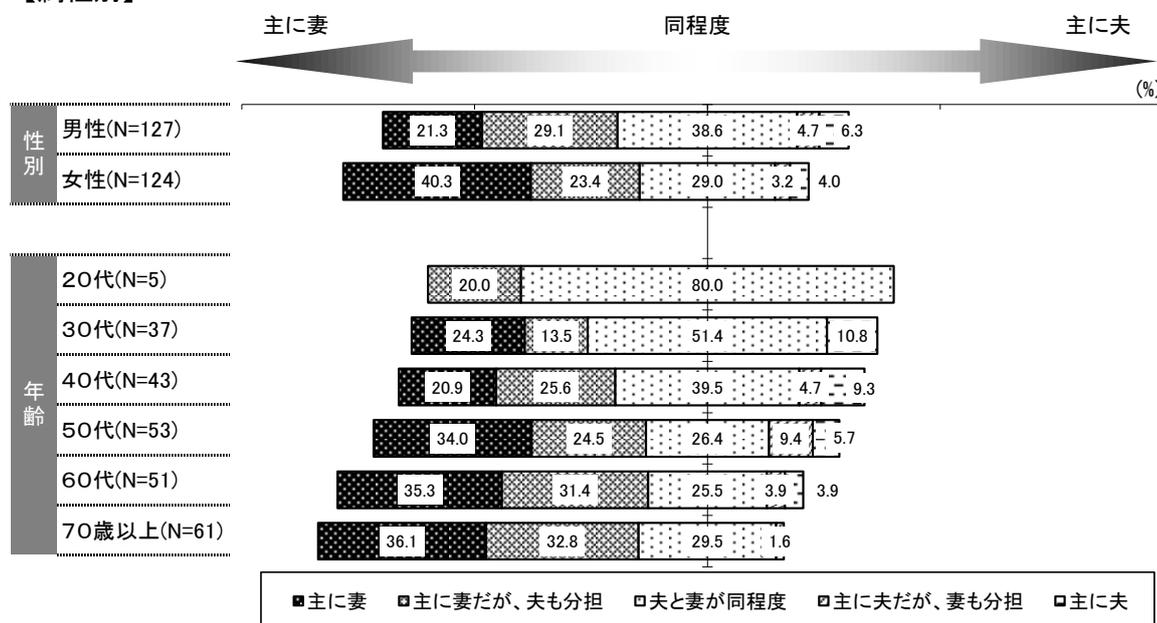


⑥ 親の世話（介護）をする

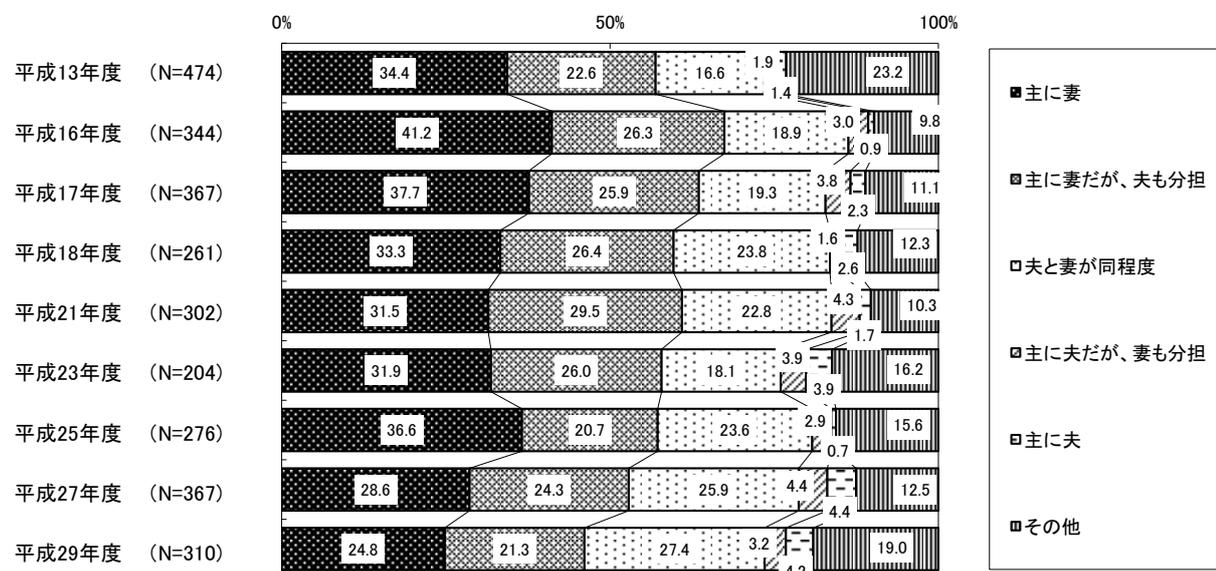
60代以上は“妻主体”が6割以上。

- 性別にみると、「主に妻」では、女性が40.3%で、男性の21.3%を上回り、「夫と妻が同程度」では、男性が38.6%で、女性の29.0%を上回っており、男女間に認識の差がみられる。
- 年代別にみると、“妻主体”（「主に妻」＋「主に妻だが、夫も分担」）の割合は、60代、70歳以上で6割を超え、50代でも5割以上となっている。「夫と妻が同程度」では、20代で8割を占めている。
- 経年比較をみると、“妻主体”は、平成27年度、29年度で減少傾向にある。

【属性別】



【経年比較】



4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

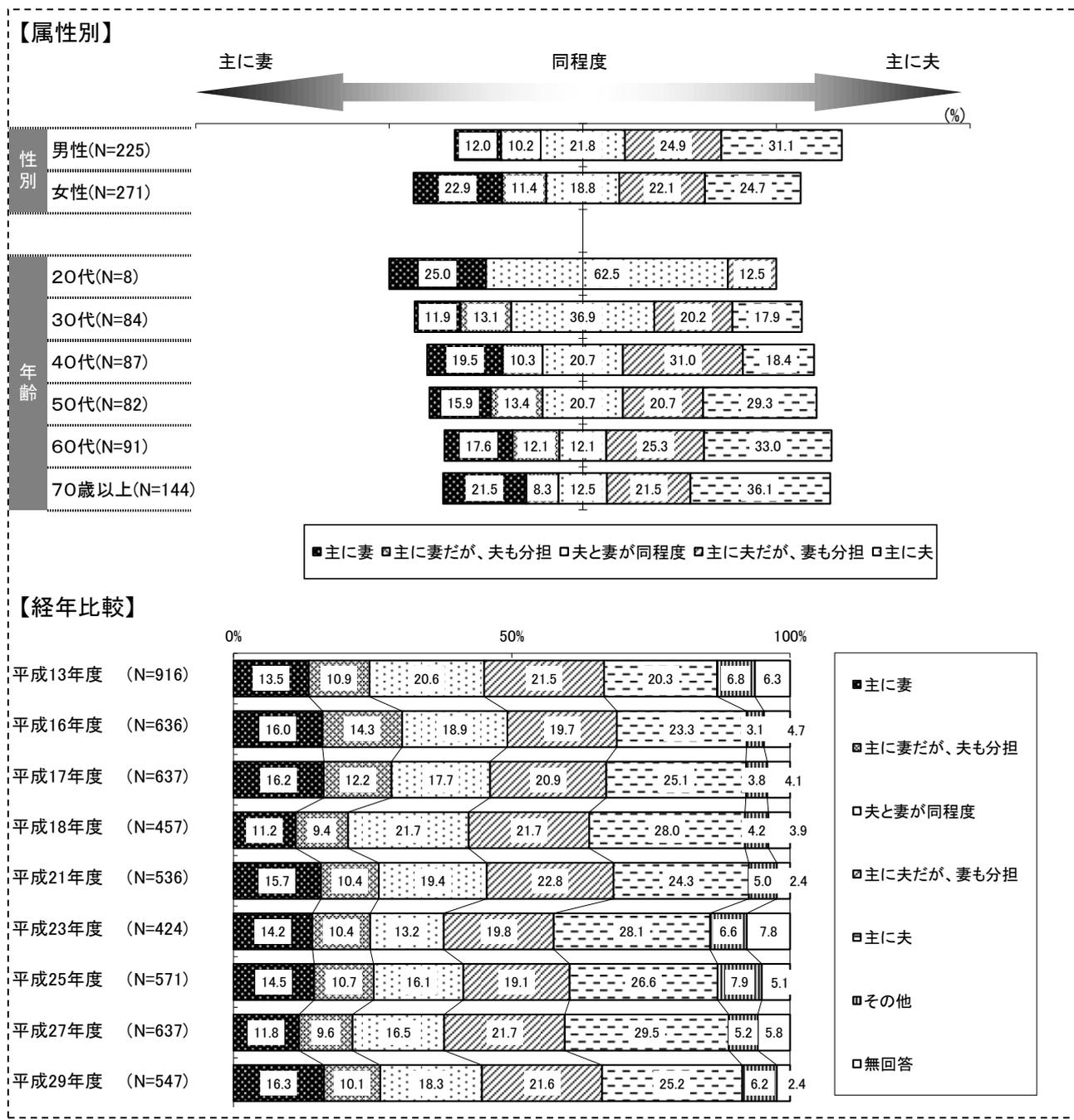
⑦ 自治会・町内会などの地域活動を行う

50代～70歳以上は“夫主体”の割合が5割以上。

■性別にみると、「主に夫」では、男性が31.1%で、女性の24.7%よりも高く、「主に妻」では、女性が22.9%で、男性の12.0%よりも高くなっている。

■年代別にみると、50代～70歳以上で、“夫主体”（「主に夫」＋「主に夫だが、妻も分担」）の割合が5割以上と高く、20代では、「夫と妻が同程度」の割合が6割以上と高くなっている。

■経年比較をみると、“妻主体”では、最も低い平成18年以降、最も高い割合となっている。

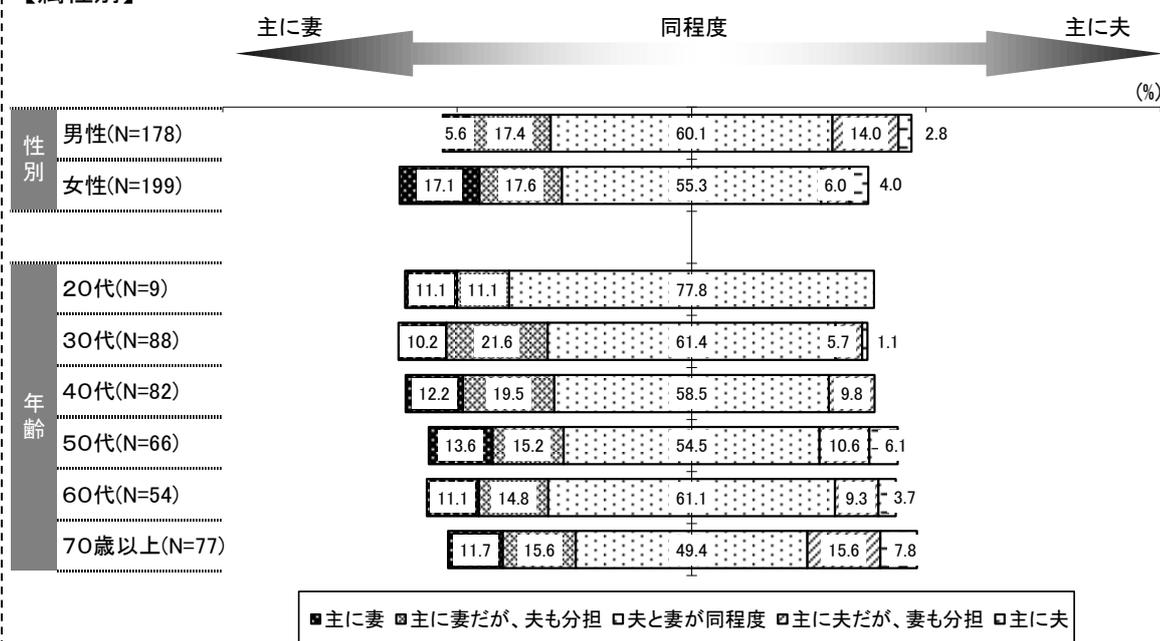


⑧ 子どもの教育方針や進学目標を決める

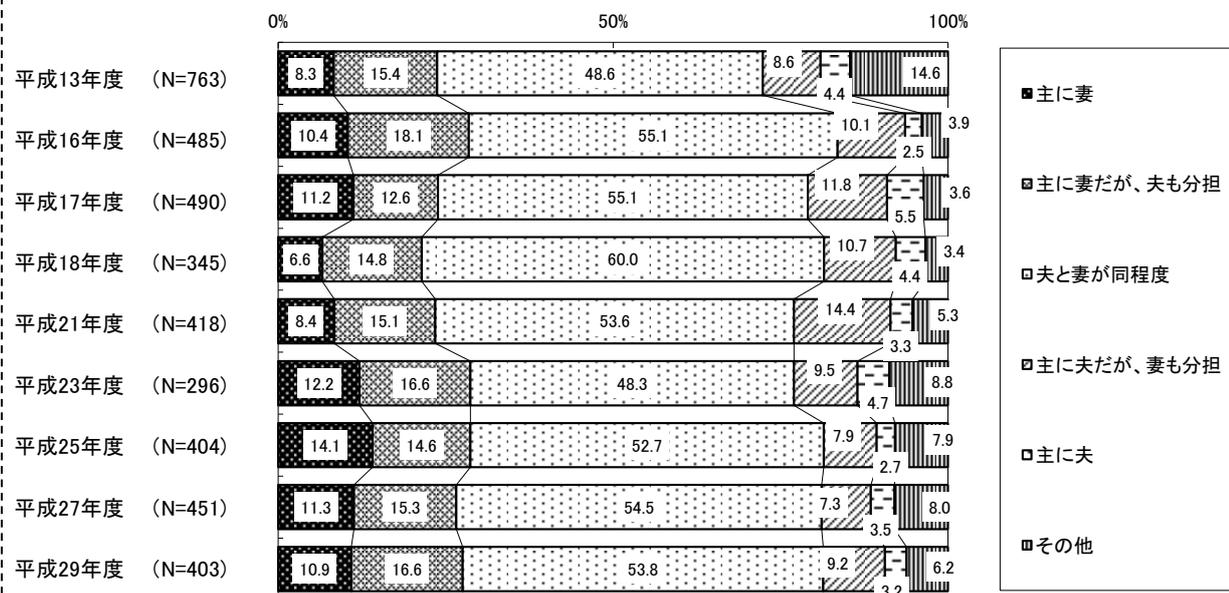
20代では「夫と妻が同程度」の割合が7割以上。

- 性別にみると、「夫と妻が同程度」では、男性が60.1%、女性が55.3%で男性が6割を超えている。「主に妻」では、女性が17.1%で、男性の5.6%と11.5ポイントの差がある。
- 年代別にみると、「夫と妻が同程度」では、20代が最も高く7割を超えている。30代から60代までも5割以上を占めている。「妻主体」では、30代、40代が3割以上となっている。
- 経年比較をみると、「妻主体」の割合が、平成23年度以降大きな変化はない。

【属性別】



【経年比較】

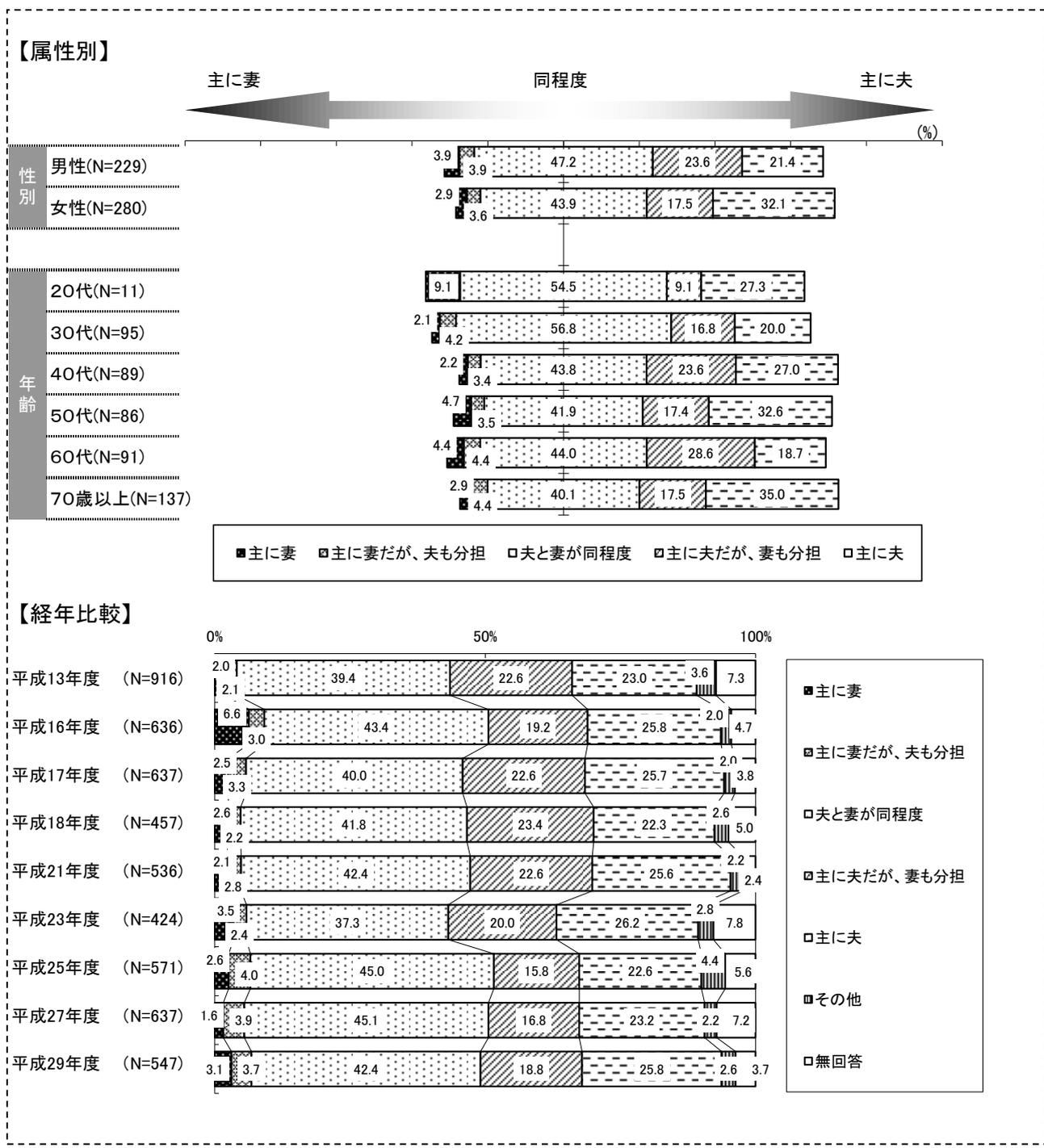


4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

⑨ 高額の商品や土地・家屋の購入を決める

20代、30代は「夫と妻が同程度」が5割以上。

- 性別にみると、「主に夫」では、女性が32.1%で、男性の21.4%よりも高くなっている。
- 年代別にみると、「夫と妻が同程度」では、30代の56.8%が最も高い。40代～70歳以上では、“夫主体”が5割前後を占めている。
- 経年比較をみると、“夫主体”の割合は、平成25年度で減少したが、以降、増加傾向にある。



### ◀ 家庭での役割分担 まとめ ▶

#### 家庭内での役割分担、“妻主体”がやや減少傾向。

■各家庭での役割について、特徴的な傾向を下表にまとめた。“①家計を支える（生活費を稼ぐ）”、“⑦自治会・町内会などの地域活動を行う”、“⑨高額の商品や土地・家屋の購入を決める”では、“夫主体”の傾向が強く、“子どもの教育方針や進学目標を決める”では、“同程度”、その他については“妻主体”の傾向にある。

■経年比較をみると、“ゴミ出しなどの簡単な家事をする”、“日々の家計の管理をする”、“育児、子どものしつけをする”、“親の世話（介護）をする”では、“妻主体”がやや減少傾向にある。

	① 家計を支える（生活費を稼ぐ）	② 掃除、洗濯、食事のしたくなどの家事をする	③ ゴミ出しなどの簡単な家事をする	④ 日々の家計の管理をする	⑤ 育児、子どものしつけをする	⑥ 親の世話（介護）をする	⑦ 自治会・町内会などの地域活動を行う	⑧ 子どもの教育方針や進学目標を決める	⑨ 高額の商品や土地・家屋の購入を決める
全体の傾向	夫主体	妻主体	やや妻主体	妻主体	やや妻主体	やや妻主体	夫主体	同程度	やや夫主体
属性別の傾向・特徴	性別	男女・夫主体	女性・妻主体	男女・妻主体	女性・妻主体	女性・妻主体	男性・夫主体	同程度	女性・夫主体
	年齢	各年代・夫主体	各年代・妻主体	20代・夫主体 30代以上・妻主体	各年代・妻主体	各年代・妻主体	50代以上・妻主体	40代以上・夫主体	各年代・同程度
経年比較	夫主体が7割以上	妻主体が8割以上	妻主体が5割以上	妻主体が7割以上	妻主体が6割以上	妻主体が4割以上	夫主体が4割以上	夫と妻が同程度が5割以上	夫主体が4割以上

## 2 子育てしやすい環境づくりに必要な行政の取組

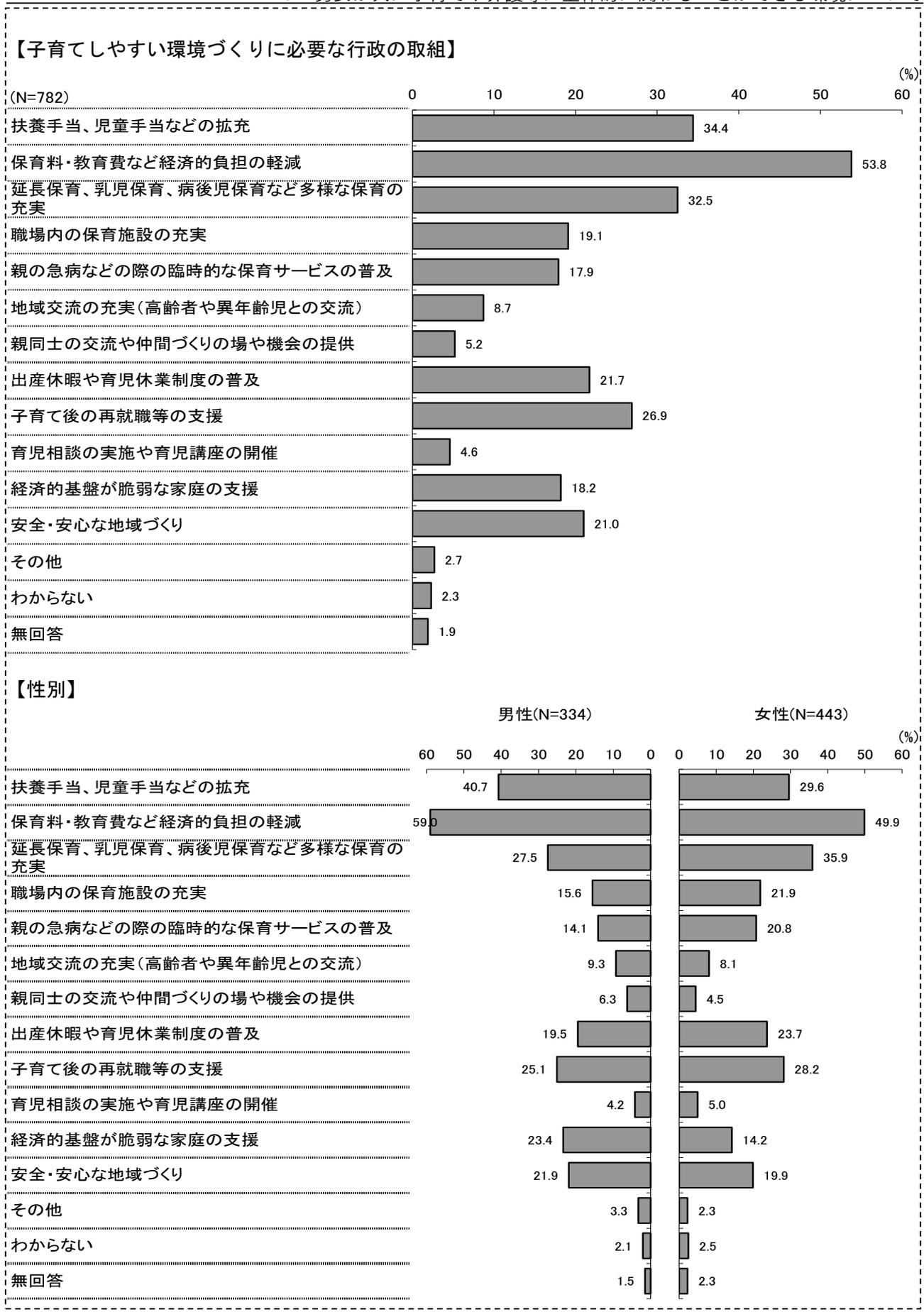
問10 子どもを育てやすい環境づくりをするには、行政としてどのような取組が必要だと思いますか。  
(3つまでに○)

**“経済的な支援”、“保育の充実”が望まれている。**

- 子どもを育てやすい環境づくりのために必要な行政の取組についてたずねたところ、「保育料・教育費など経済的負担の軽減」が53.8%で最も高く、次いで、「扶養手当、児童手当などの拡充」が34.4%、「延長保育、乳児保育、病後児保育など多様な保育の充実」が32.5%、「子育て後の再就職等の支援」が26.9%と続いている。
- 性別にみると、「保育料・教育費など経済的負担の軽減」では、男性59.0%、女性49.9%で最も高くなっている。次いで、男性は「扶養手当、児童手当などの拡充」が40.7%（女性29.6%）と高く、女性は「延長保育、乳児保育、病後児保育など多様な保育の充実」が35.9%（男性27.5%）と高くなっている。
- 女性の子育て世代に限ってみると、「保育料・教育費など経済的負担の軽減」では、勤め人・自営業で61.2%、専業主婦・無職・学生等で51.1%と最も高く、次いで、勤め人・自営業は「扶養手当、児童手当などの拡充」が47.1%（専業主婦・無職・学生等31.1%）、専業主婦・無職・学生等は「延長保育、乳児保育、病後児保育など多様な保育の充実」が42.2%（勤め人・自営業41.3%）となっている。
- 経年比較を見ると、「地域交流の充実（高齢者や異年齢児との交流）」と、「親同士の交流や仲間づくりの場や機会の提供」が最も低くなっている。

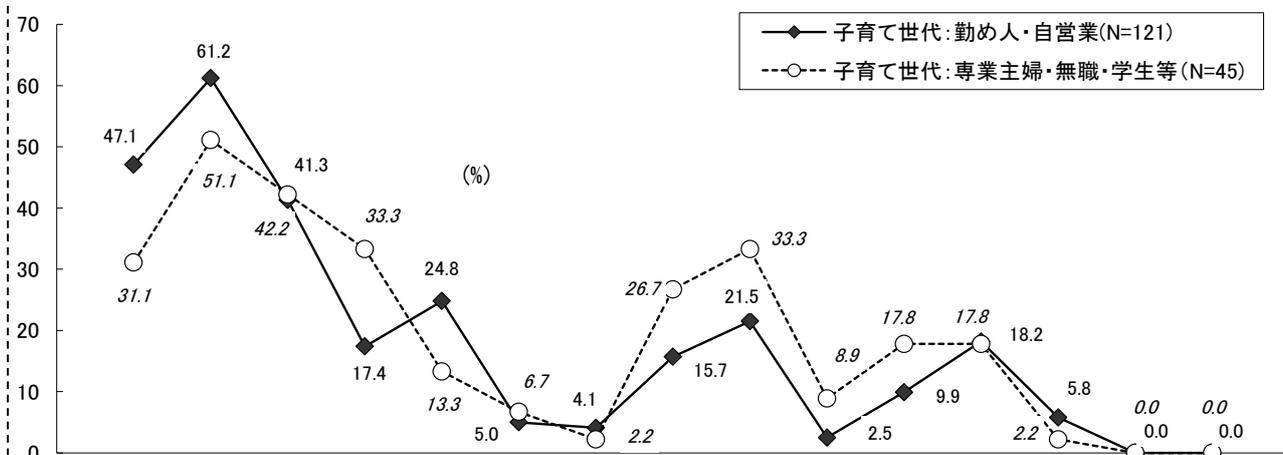
「保育料・教育費など経済的負担の軽減」は、平成23年度以降5割以下となっていたが、今年度5割以上と増加した。「扶養手当、児童手当などの拡充」では、平成23年度を境に増加傾向にある。

4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について



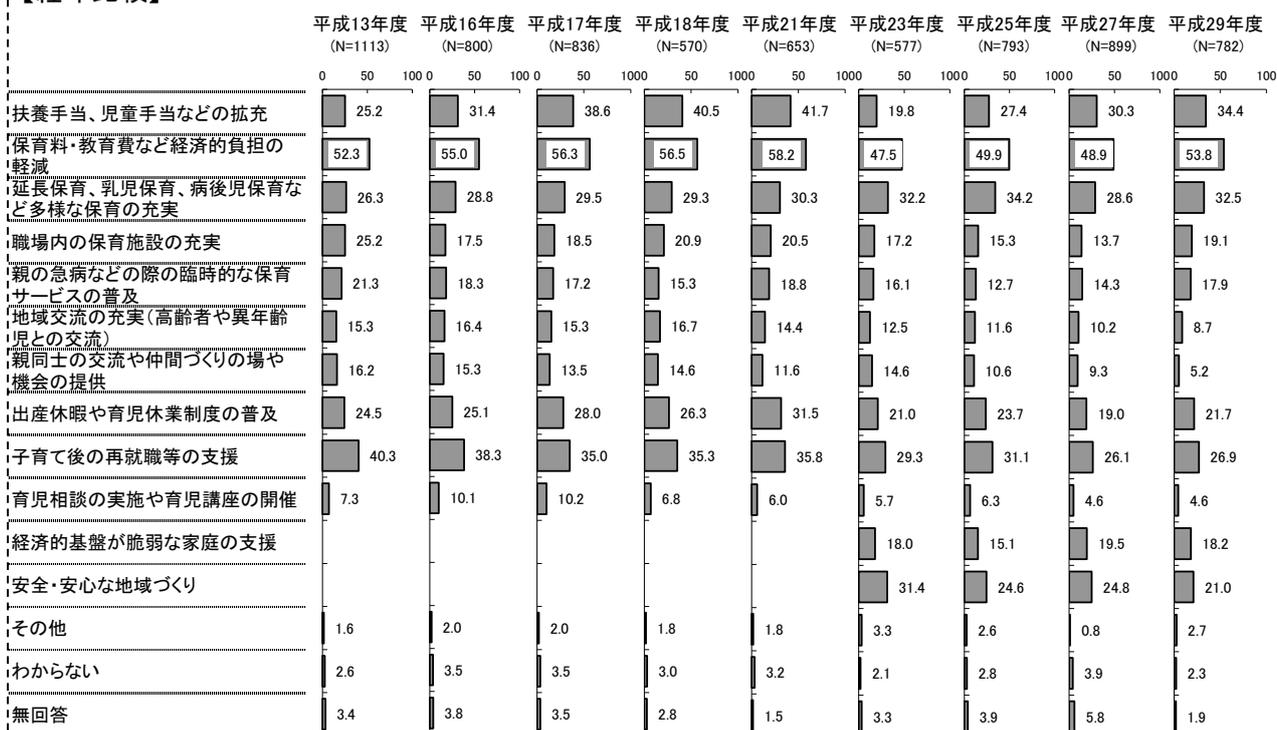
4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

【女性の子育て世代・職業の有無別】



- 充 扶養手当、児童手当などの拡
- 担の軽減
- 保育料・教育費など経済的負
- 延長保育、乳児保育、病後児
- 保育など多様な保育の充実
- 職場内の保育施設の充実
- 親の急病などの際の臨時的な
- 保育サービスの普及
- 地域交流の充実(高齢者や異
- 年齢児との交流)
- 親同士の交流や仲間づくりの
- 場や機会の提供
- 及 出産休暇や育児休業制度の普
- 子育て後の再就職等の支援
- 育児相談の実施や育児講座の
- 開催
- 経済的基盤が脆弱な家庭の支
- 援
- 安全・安心な地域づくり
- その他
- わからない
- 無回答

【経年比較】



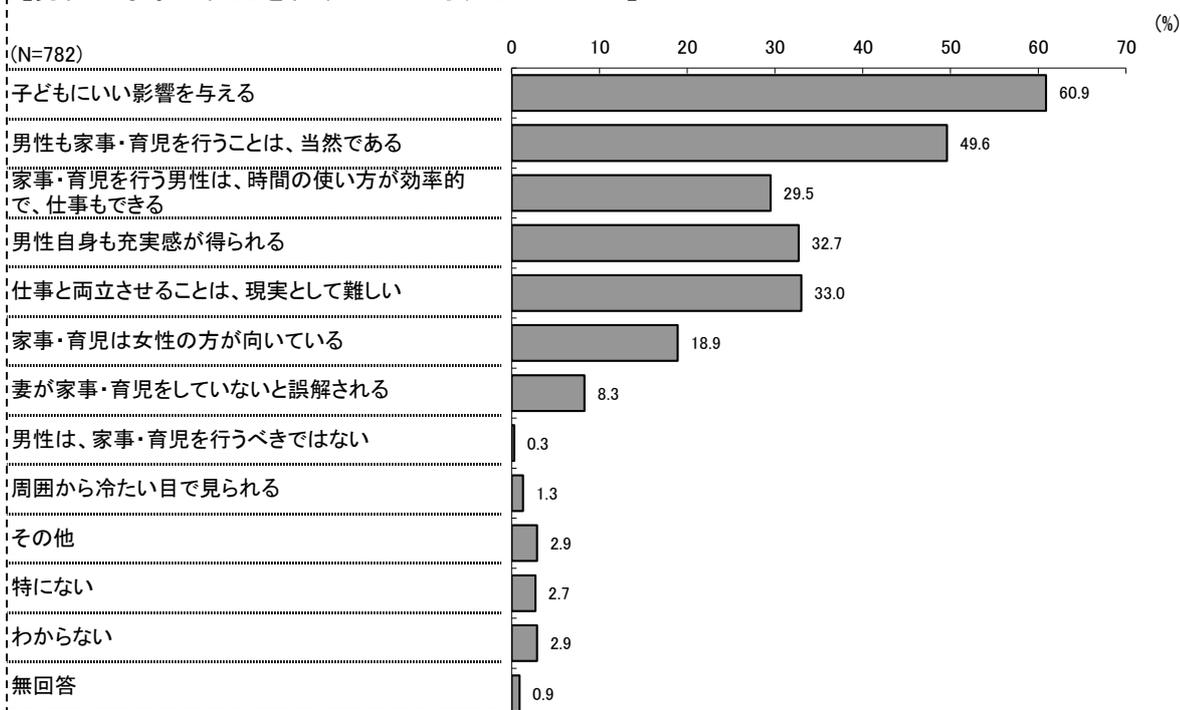
3 男性が家事・育児を行うことに対するイメージ

問11 男性が家事・育児を行うことについて、どのようなイメージをお持ちですか。  
(あてはまるもの全てに○)

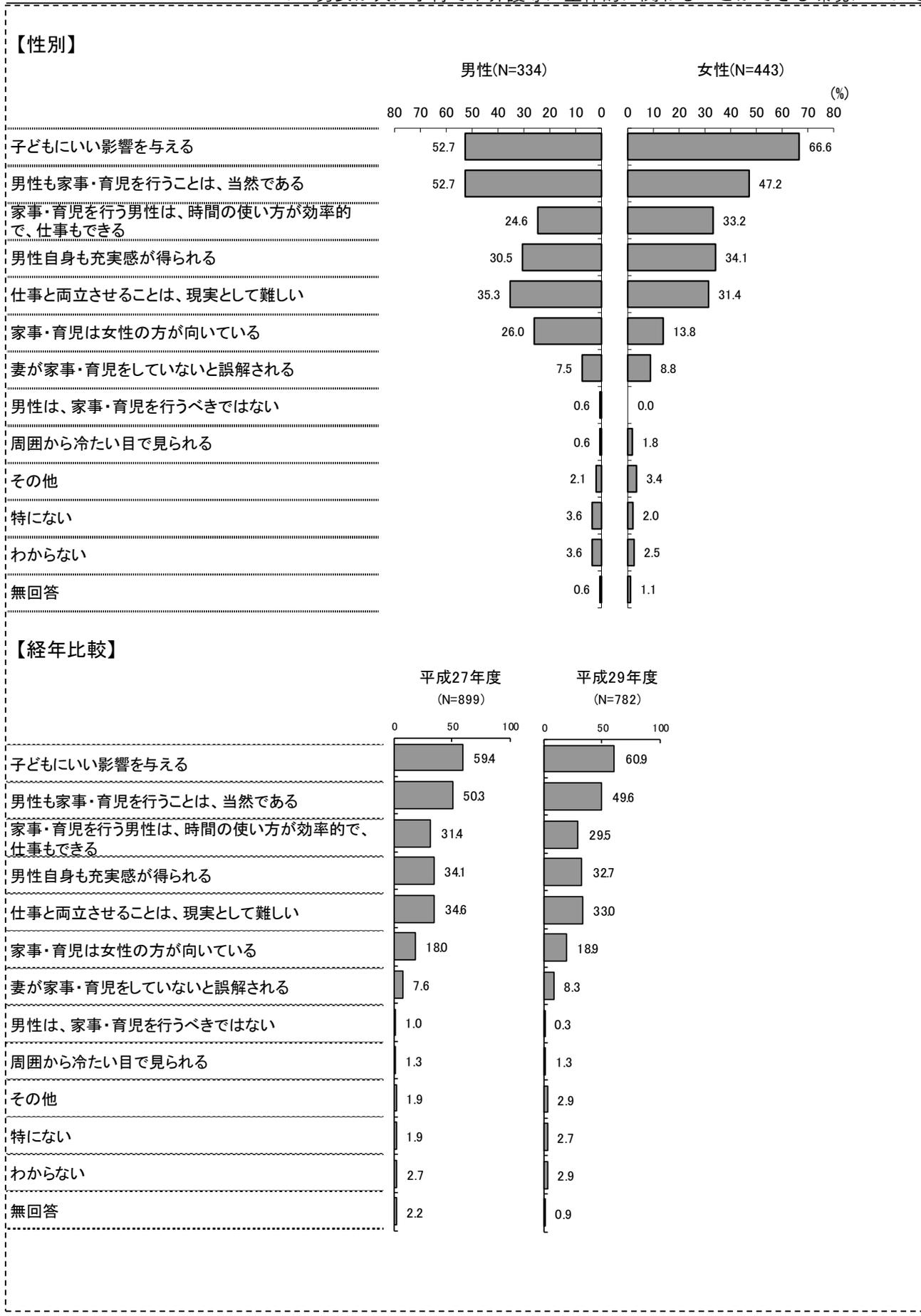
「子どもにいい影響を与える」が6割以上。

- 男性が家事・育児を行うことに対するイメージについてたずねたところ、「子どもにいい影響を与える」が60.9%で6割を占めている。以下、「男性も家事・育児を行うことは、当然である」が49.6%、「仕事と両立させることは、現実として難しい」が33.0%、「男性自身も充実感がえられる」が32.7%と続いている。
- 性別にみると、女性では、「子どもにいい影響を与える」が66.6%で最も高くなっている。男性では、「子どもにいい影響を与える」と、「男性も家事・育児を行うことは、当然である」がともに52.7%で高くなっている。「家事・育児は女性の方が向いている」では、男性が26.0%、女性が13.8%と、男女の意識の差がみられる。
- 経年比較を見ると、前回と比べて大きな変化は見られない。

【男性が家事・育児を行うことに対するイメージ】



4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

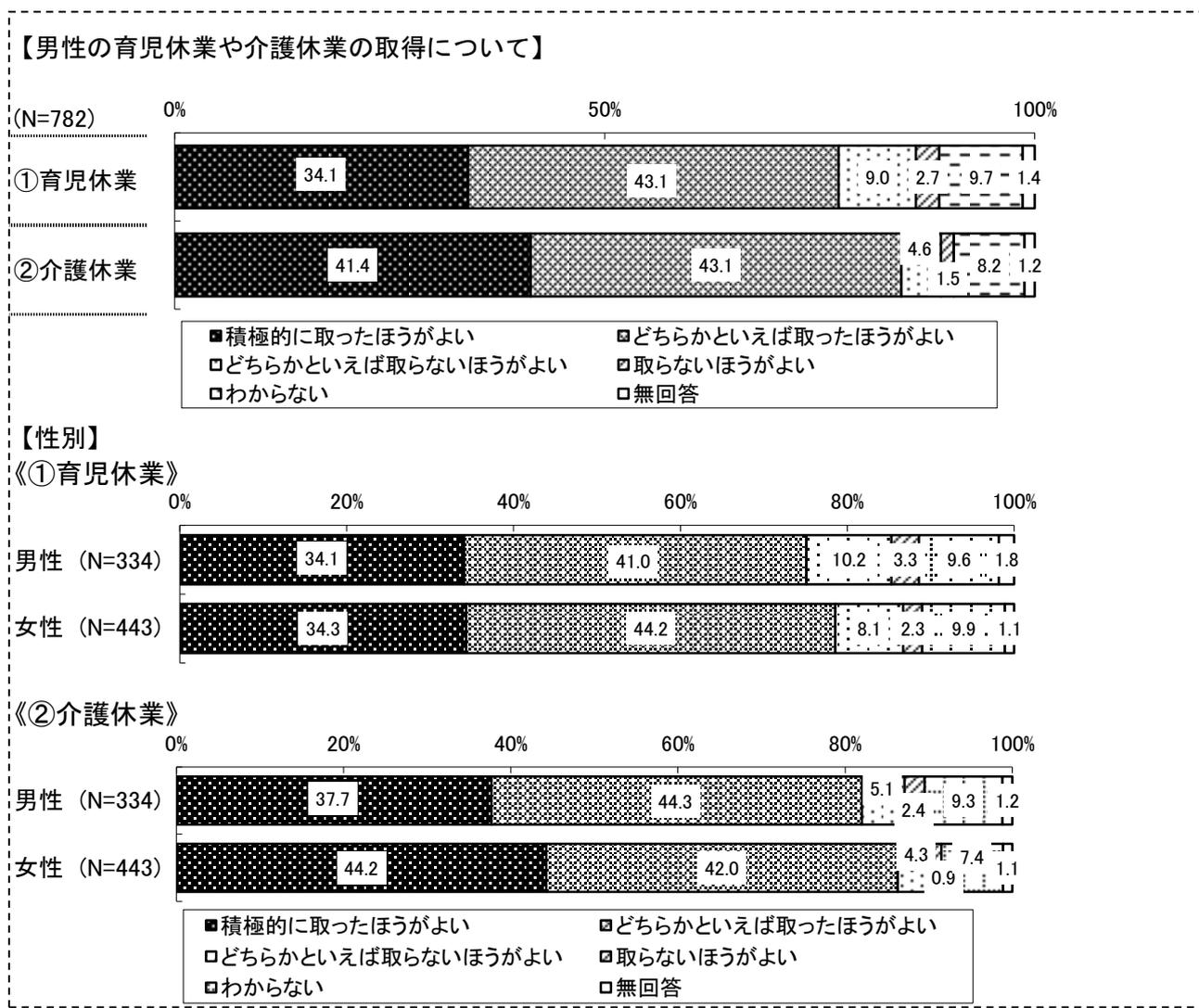


4 男性の育児休業や介護休業の取得について

問 12 育児や介護を行うために、育児休業や介護休業を取得できる制度があります。  
この制度を活用して男性が育児休業や介護休業を取ることに、あなたはどのように考えますか。  
(それぞれ1つに○)

“取ったほうがよい”は、育児休業 77.2%、介護休業 84.5%。

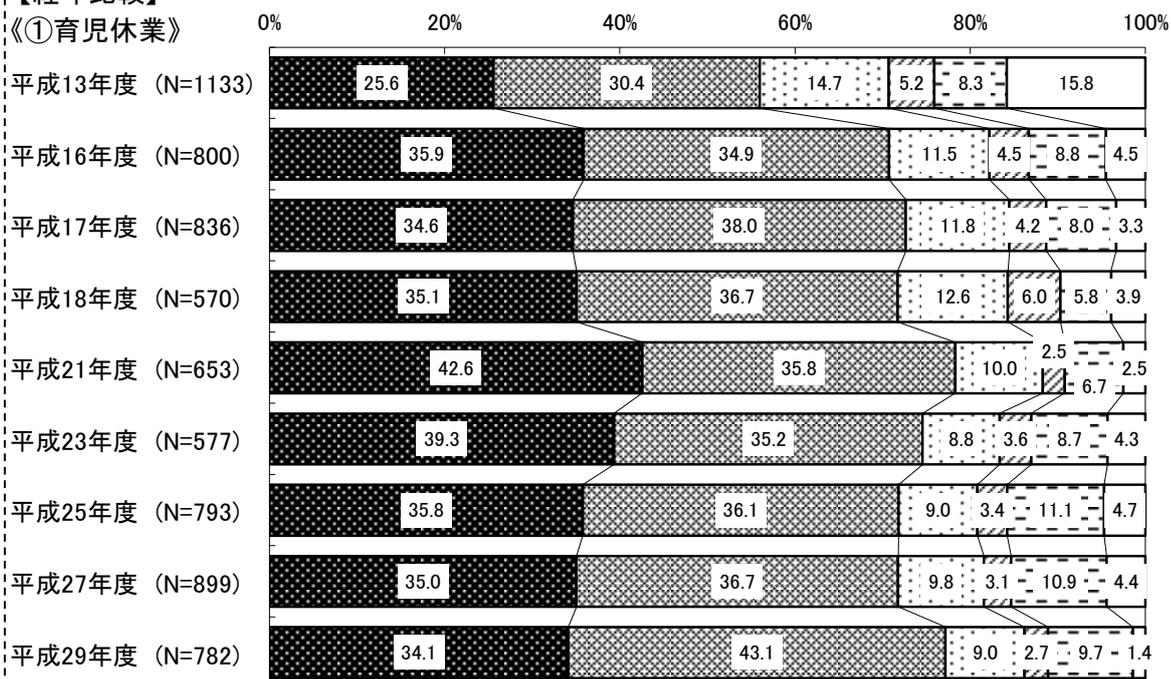
- 男性の育児休業の取得についてたずねたところ、「積極的に取ったほうがよい」は 34.1%、「どちらかといえば取ったほうがよい」が 43.1%で、合わせて 77.2%が“取ったほうがよい”となった。
- また、男性の介護休業の取得についてたずねたところ、「積極的に取ったほうがよい」が 41.4%、「どちらかといえば取ったほうがよい」が 43.1%で、合わせて 84.5%が“取ったほうがよい”となった。
- 性別にみると、育児休業、介護休業ともに、“取ったほうがよい”は、男性より女性の方が上回っている。
- 経年比較を見ると、育児休業では減少傾向にあった“取ったほうがよい”は、今年度高くなっている。介護休業では、“取ったほうがよい”は今年度8割を超えている。



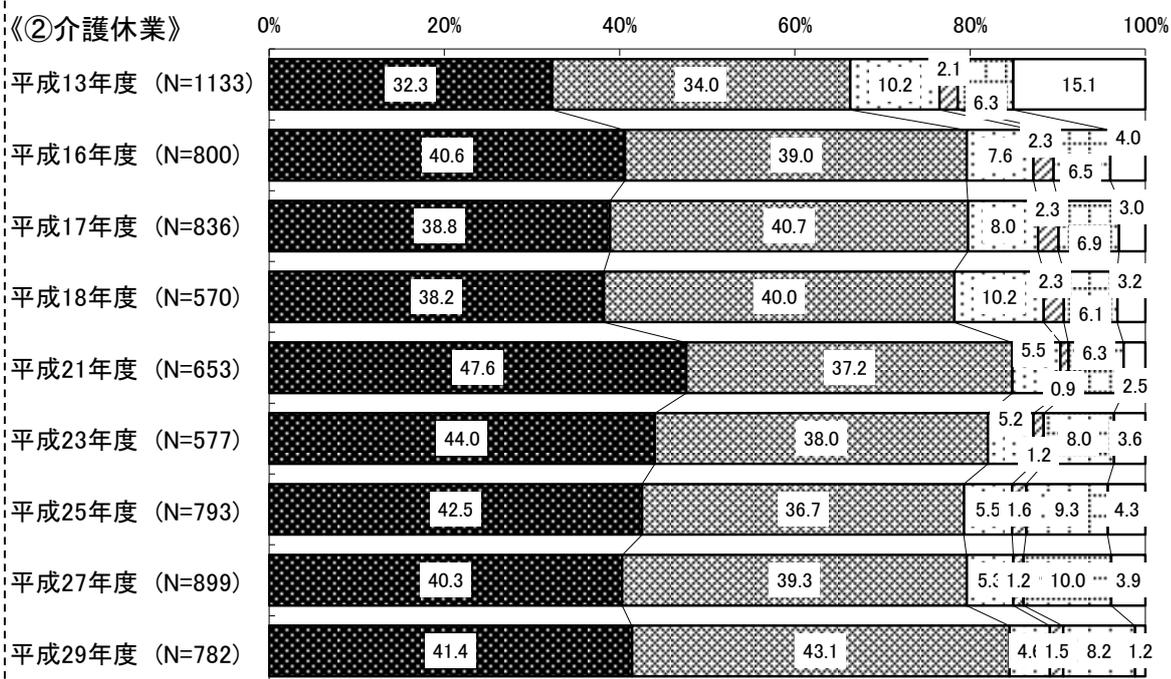
4 男女が共に子育てや介護等に主体的に関わることができる環境について

【経年比較】

《①育児休業》



《②介護休業》



- 積極的に取ったほうがよい
- どちらかといえば取ったほうがよい
- どちらかといえば取らないほうがよい
- 取らないほうがよい
- わからない
- 無回答